

地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

DePOLA

でほら

40

2011年
春夏号

特集 夢を紡ぐ—— 地域伝統のものづくり職人



本誌は、宝くじの普及宣伝事業として作成されたものです。

「夢を紡ぐ―地域伝統のものづくり職人」

●特集企画に寄せて



藁で編み上げた猫つぐらと飯つぐら
(長野県栄村)

うと思ってね」と言う。雪や雨で湿度が高い日は糸が切れにくく機織りに適しているそうで、機織りは越後の冬の大事な生業でした。

麻糸を紡いで織るかすりで、30年程前はまだ近所に数人の織り手仲間がいたと記憶しています。その布が、今では貴重な越後上布であること、苧麻ちよま等を紡げる人も織姫も一、二人しかいなくなったことを最近知りました。

日本各地には、その地域の自然の恵みを活かしてつくった生活用具や趣向品、質の高い材料を高度な技術で製造して全国で販売されるようになった伝統工芸品等が沢山あります。豊かな自然と四季に恵まれている日本人は、自然を受け入れて活用する文化を身につけてきました。現在「伝統的工芸品」と指定されているものが多いのは、日本人の自然や風土への慈しみ、身につけた技法をさらに高めて継承していこうという几帳面さ、誠実さの証でしょう。

しかし、商品生産は機械化され価格競争が激化、生活様式も自然環境も大きく変化した現在では、吟味した材料で手造りを主体にしてつくり続けていくことは大変厳しい状況です。

「伝 統的工芸品」として経済産業省が指定しているものは現在、織物、染色品、陶磁器、漆器、木工・竹工・金工・石工品、和紙、文具等211品目あります。

伝統的工芸品の指定を受けるには、主として日常生活で使われるもので、製品の主要部分が手づくりであり、製造技術・技法と使用される主な原材料がともに伝統的なものであること。そして、一定の地域で、ある程度の人々が製造に係わっていることが必要です。また、伝統とは、概ね100年間以上の継承を意味しています。

本誌40号では「地域伝統のものづくり職人」特集として、伝統的工芸品を中心に、ものづくりをしている職人さんや地域の人達に登場していただきました。

それらの工芸品は、脈々と受け継がれてきて地場産業になっているものが多いものの、一方では、中断したり廃業した工房等も多いと思われる。

後継者不足に加え、製作に必要な機器や道具は特注品が多く、「今では造ってくれるところがない」と、今後に不安を抱く声もよく聞かれました。また、伝統的工芸品には指定されていませんが、農家の冬場の手仕事として作られてきたものなどで、地域で継承されてきたもの、希少価値の高いものもあり、これらも作り手がいなくなったり、材料となる草木等の入手が難しくなるなど、その継承が危ぶまれています。

「気」が遠くなるような時間を要しながら、材料を確保・加工し、繊細で複雑な技法でつくられる伝統的工芸品の数々。原材料にする植物等も自分たちで種を確保して栽培しなければならぬものもあります。中には自治体やJAの支援・協力によって、かろうじて継続しているものもあります。

こうして伝統のある工芸品を見ると、その製作過程と希少性から高価になるのは避けられませんが、しかし購入する人が限られてくると、本来の日常生活品として使うという製品の価値や、作り手の熱い想いが消費者に伝わっていきません。

最近では、都市のデパートやイベント会場へ工芸士自らが出向いて、製品をPRする実演販売も多くなっています。インターネットによる通信販売も少しずつ成果を上げています。

しかし、そうした努力も、伝統的工芸品等を身近なものにしていくには、まだまだ十分ではありません。

それぞれの地域の風土、生活に根ざした伝統のある工芸品の生産を、産業として、また文化として継承させていくことは、地域の活力を維持していく上でも大切なことであり、国や自治体による今以上の支援を期待したいものです。

「では」編集部
財団法人過疎地域問題調査会



い草で編んだ椅子。い業研究所展示室で
(熊本県八代市)

[夢を紡ぐ——地域伝統のものづくり職人]

●特集企画に寄せて—— 2



▲町屋を活かして塩引した鮭を吊す「衾っ川」

■樹と語る

・天然杉の命を宿す機能美の工芸品

大館曲げわっぱ (秋田県大館市) (有栗久) —— 4

・木の個性とろくろ細工職人の真剣勝負

南木曾「木地師の里」 (長野県南木曾町) (有野原工芸) —— 7

・シャッター街NO! 風情ある城下町に

むらかみ町屋再生プロジェクト

(新潟県村上市) —— 10

■炎への挑戦

・近代化産業遺産の登り窯が復活

三津谷煉瓦窯再生プロジェクト

(福島県喜多方市) —— 13

・土佐の匠が鍛え上げた伝統の切れ味

土佐打刃物 (高知県香美市土佐山田町) —— 16



▲鎌の火入れ(富士源刃物製作所)

■草木と根比べ

・本州唯一、栽培・生産技術を継承する

からむし織の里 (福島県昭和村) —— 20

・安全で快適な国産畳表づくり

い草の育成とゴザ織り (熊本県八代市) —— 23

・建設業界が協力、ミツマタの栽培・加工

三好お札の里 (徳島県三好市池田町) —— 26

・縮れ穂先を生かして編み上げる

南部箒 (岩手県九戸村・有高倉工芸) —— 28



▲お札用のミツマタを栽培する池北、大黒さん



▲猫つぐらを作る高橋基治さん

■夢と暮らしを紡ぐ

・雪深い山里／秋山郷の暮らしが育む

猫つぐら (長野県栄村) —— 31

・民族の誇りをもって

アイヌ文化を未来へ伝える

(北海道平取町二風谷) —— 34



▲萱野茂二風谷アイヌ資料館・萱野知子さん

■INFORMATION

各地の伝統的工芸品

雄勝硯／村上木彫堆朱／越後上布・小千谷縮／

宮之城竹細工品 38

経済産業大臣指定の伝統的工芸品(品目別) 39

過疎地域問題調査会からお知らせ 39

編集後記／奥付 39

「でぼら」とは——

Depopulated Local Authorities (人口が減少した、つまり過疎化した地方自治体) からのネーミング。

過疎市町村の多くは山間地や離島など森林面積の多い農山漁村地区で、全般に人口の減少や高齢化が進んでいます。国土の保全・水源のかん養・地球の温暖化の防止などの多面的機能により、私たちの生活や経済活動に重要な役割を担っています。このような過疎地域は、豊かで貴重な自然環境に恵まれ、伝統文化や人情あふれる風土が数多く残っています。

多くの人たちが過疎地域を理解し、過疎地域と都市地域が交流をすすめ、共生していくためのホットラインとして、また過疎地域相互間の情報誌として「DePOLA」(でぼら)を発行しています。

●表紙写真

上左／「高倉工芸」製作の南部箒
上中／アイヌ文化情報センター二風谷工芸館で文様刺繍をする関根真紀さん
上右／からむし織をする酒井モト子さん
中／「栗久」製作の大館曲げわっぱ商品の数々
下左／木製ポールペンのろくろ細工実演をする「野原工芸」野原一浩さん
下中／い草の苗植えをする下永しおりさん
下右／鉦を鍛造・成形する「宗石工房」の宗石博孝さん

樹と語る

①

天然杉の命を宿す機能美の工芸品 大館曲げわっぱ

(秋田県大館市)
秋田眞木大館市
(有)栗久

ご飯を美味しくする魔法の器

厳しい自然の中で何百年と生きてきた秋田杉。その美しい柾目と香りを活かした優雅で気品ある器が大館曲げわっぱ。江戸時代より伝わる高度な職人芸だが、(有)栗久では良質の器を均一に製造するために、近代的な手法を積極的に開発して若い技術者を育成している。人気の弁当箱に加えて、フルーツボールやリングカップ等の新作も製造、全国伝統的工芸品展で数々のグッドデザイン賞を受賞している。



底入れ、接着作業をする工藤さん、成田さん、栗盛社長(右)

かつての賑わいを語る大館市の商店街は、シャッター街にならないように工夫しながら活気を維持、その一角に瀟洒な(有)栗久の店舗がある。店頭ではデパートに送る弁当箱等を一点ずつ丁寧に箱に入れていた。

「不景気効果というんですかね、弁当箱がよく売れているんですよ。お弁当を持参する人が増えているんです。わっぱは湿気を取るのでご飯は銀シャリになります。昔から釜で焚いたご飯はお櫃に移し代えて美味しく食べるのが日本人の知恵だった。お櫃に入れると真夏でも2日間は痛みません。わっぱやお櫃は繰り返し使うことで木の持つ機能が生き続け、20年30年は使えます。日本の気候風土に根ざした生活用品です」と(有)栗久社長、伝統工芸士の栗盛俊二さん(62)は語る。

大館曲げわっぱは樹齢200〜300年の天然秋田杉の柾目を使う。目が細かくて美しいのが特色で、それを3・5〜10mm幅の板状にして曲げていき、軽くてしなやかな機能性に富んだ器に仕上げていく。

「食べ物を入れるには杉が最高で、湿気を取り防腐効果もあります。ヒノキやサワラは風呂桶等にはいいが、匂いがきつ過ぎ、軽やかさが無い」と専門的な話も分かりやすく説明してくれる。



栗盛家は江戸時代よりわっぱ作り等の木工品加工を手掛けて約200年の歴史を持つが、「栗久」として正式に創業したのは明治7年。俊二氏で6代目になる。父親は桜皮を使う樺製品を主体に作っており、息子には曲げわっぱ製造を望んでいたという。能代工業高校木材工芸科を出て父親の仕事を手伝いだした20代後半の頃、父親は倒れて半身不随となった。

栗久自慢の曲げわっぱ商品。人気の弁当箱、お櫃、グッドデザイン賞に輝くリングカップ、ぐい飲み、アイスボール等



曲げわっぱの技法を徹底的に学ぶと共に、煮沸、曲げ加工、乾燥等の一連の作業を若い職人でも失敗なく手際よく行うために様々な用具や機器を開発してきた。俊二氏は38歳で伝統工芸士に認定され、大館曲げわっぱを秋田県の特産品として業界発展に努めると共に、イギリス、中国、ニューヨーク等へも出かけて製作実演し、日本の工芸品の素晴らしさをPRする活動にも当たっている。

また、弁当やお櫃、飯切り等の伝統的用具に加えて、リングカップやぐい飲み、徳利、蕎麦用具等の新しいわっぱも次々開発し、多くのグッドデザイン賞を受賞している。柾目模様と木の質感をシャープに機能的に仕上げたもので、美的センスに溢れている。

大館で曲げわっぱが発展したわけ

大館曲げわっぱは、きこりが杉柾で曲物の器を作ったのが始まりとされる。藩政時代に大館城主佐竹西家が豊富な秋田杉に着目して武士の内職にわっぱ製作を奨励、農民には年貢米の供出代りに杉の木を山から城下へ運搬させたという。

栗盛社長はさらに「秋田県には三本の一級河川があるが、その一つ米代川は杉の生育に大変よい土壌で、美人杉と言われてきました。冬に伐採したものを春になると米代川から運搬し、良い材は能代に運びました」と語る。

最盛期には30社400人が曲げわっぱを製造していたが、いまは9社約200人へと減少している。しかし曲げわっぱを主体にした木工芸品製造にこれだけの職人さんが従事し

ているのは全国的にも貴重で、大館市が秋田県を代表する伝統工芸品の街、職人の街として健在であることが伺える。

栗久には15人の社員がおり、平均年齢は40歳。ベテラン女性たちの中で20代の青年の真剣な姿が印象的だった。殆どが地元の若者たちで、将来は工芸士をめざして修業中だ。

一方、材にする天然杉は大変貴重となった



▲アイスペール製作。成形用金具にわっぱを巻いていく



▲弁当箱の底を張る作業。木片で形を整えサツと熱を加える



▲製材済みの秋田杉。製作するわっぱに合わせてカットしていく

ため、大館曲げわっぱ協同組合が樹の確保と製材をまとめて発注し、製材したものを各社が仕入れている。

大館曲げわっぱ協同組合では「曲げわっぱの森育成協議会」を結成、材となる杉を持続的に確保するため、林野庁や米代東部森林管理署等と提携して「曲げわっぱの森」の育成活動に力を入れている。大館市には他に「秋



◀桜皮を丁寧に縫い込み特有の模様を作っていく栗盛社長



▲曲げたわっぱはしっかり固定して乾燥する
▼接着、研磨作業をする若者たち





▲仕上げ作業とチェックをする齋藤ちどりさんと伊藤さん(右)
▶成形用の金具を収納する部屋で、栗盛社長



田杉・桶樽の会「樺細工の会」等があり、資材となる森の育成と材料の提供に取り組んでいる。

蓄積してきた技術を現代に継承する

店舗の裏に製造工場があり、栗盛社長が案内してくれた。

曲げわっぱ製造には10種の工程があり、それらを二階の各所で効率よく行っている。

製材されて届いた杉板は、製作する商品の長さや幅、厚みに応じて寸分の狂いもないように製材、カンナを施し、それを大きなステンレス製の窯で一晩水に漬けたあと、約5時間、90℃で煮沸する。現在は安全用に電気ヒーターを使い自動管理している。次はやわらかくなった板を曲げ加工する作業。台上でコ

ロ(道具)に巻き込むようにして曲げ、重ね合わせた部分を仮止めして乾燥させるという熟練を要する曲げ加工だが、製作する商品に合わせて金型があり、さらに曲げる角度等に合わせ木片を挟んだり、仮止め器具を使って熱風を加える等、随所に作業を正確にスピーディーに行うための工夫があった。

木鉋で仮止めした器はしつかり自然乾燥した後、接ぎ手部分を接着剤で繋ぎ、綴穴を開けて、この穴を桜皮で縫い止める。そのあと底を入れたり蓋板を合わせていく。接着したり底を入れる作業をしていたのは入社6年目の成田誠功さん(28)と工藤琢矢さん(26)。

すべての工程を熟知し、いずれ一級技能士、将来は伝統工芸士の資格を取得したいと言う。

栗久には社長の他に2人の伝統工芸士がおり、その一人が仕上げ作業をする伊藤朋子さん。出来あがった商品を入念にチェックし、特にすべての角や接ぎ目にヤスリやサンドペーパーをかけて、なめらかな肌合いに仕上げていた。細かいので女性向きの仕事である。

「ここは冬には1m50cmの雪が積もりますが、室内でこのようなやり甲斐のある仕事を和気あいあいと続けられることは幸せです」と伊

藤さん。社長は各部を案内してくれながら「みんな良く働いてくれます。ありがたいですよ」と何度も言っていた。

一階の奥に成形用の金具を収納する部屋があった。先代たちが使ってきた貴重なものが何百種も並んでいる。昔は大家族だったため特大のお櫃が作られ、ビックな成形金具が多い。栗久の歴史と財産が詰まった宝物殿であった。

昨年商店街の一角に曲げわっぱ協同組合が運営する体験工房が開設された。組合員の商品を展示するほか、ここでは一般の人が曲げわっぱ作りを体験できる。この日は昨日に続いて曲げわっぱ製作を体験する岩手県からきた高橋修三さんの嬉々とした姿があった。「いやあ楽しい、夢中です」と宿泊を延ばして工芸士から指導を受けていた(約2時間、3000円)。職員の佐々木悌治さんに秋田杉について聞くと「天然杉と言っても枝打ちして手入れしてきた樹でないダメです。いま国有林内に百年先を見ながら広大な杉林を育成しています」と語っていた。

文/浅井登美子 写真/小林恵



▲上/曲げわっぱ作りを体験する高橋さん(岩手大学地域連携推進センター/右)
下/秋田杉について語る佐々木さん。伝統工芸士でもある

●(有)栗久 ☎0186-42-0514 <http://www.kurikyū.jp/>
●曲げわっぱ体験工房 ☎0186-42-7502

木の個性とろくろ細工職人の真剣勝負

南木曽「木地師の里」

（長野県南木曽町）
（有野原工芸）

木が好き、工作が好き

長野県南部、伊那谷から木曽へ向かう清内路峠を木曽へ下ったところに、ケヤキ、トチ、セン、カツラ等の天然木目を活かしてろくろ細工する「木地師の里」がある。原木・木取から塗装まですべての作業を一人の職人が行う、木曽を代表する職人たちの工房集落で、本来は盆や器、椀、茶筒等の丸い形の木工品が主流だったが、いまはモダンな机・文具や家具も製造されている。南木曽ろくろ工芸協同組合理事長を務める野原工芸を取材した。

「木地師の里」は南木曽駅から車で20分ほど、中山道の宿場で知られる妻籠宿からさらに入った吾妻漆畑地区にあり、伊那地方を結ぶ国道256沿いに7軒の店が、各自の特色を活かしたろくろ工芸品を製造・販売している。昭和55年3月に国の伝統的工芸品産地に指定された。

その一軒、(有)野原工芸の店に入ると、まず右手の壁際に設置されたオーディオ木製プレイヤー、スピーカー等の音響製品が目についた。

ジーパン姿で現れたのは野原廣平さん(60)。

「これは私の趣味の一部で、木と音の関係をj知するために、いろいろの木で作って楽しんでるんです」

子供の頃から木が好き、木工品作りが好きだったと言う野原さんは、中学生の頃から真空管アンプやスピーカーボックス等を手作りした。いま店に展示してある木製スピーカーボックスは、クルミ、タモ、サクラ等5種類の木を使って作ったもので「意外と硬い木の方が音響がいいんです。木には音を豊かに広げて空気と触れて響かせる効果があります。合板では全然だめです」と楽しそうに説明してくれる。

柔らかい音の響きは抜群だが、木の質感を活かしたシンブルなデザインも美しく、室内にぴったりの現代アートだ。希望者からの要望でムク材で作ったスピーカーボックスの一部が通信販売で売られている。

他にも、音を自動的に生成して再生する「MIZUKOTO」というタモの音響製品、木で作った木製のライトもある。「MIZUKOTO」はあるメーカーと共同開発、せせらぎ、風鈴、琴、波等や野鳥等の自然の音を拾って安らぎの音楽を提供するものです」

▶4~5年以上寝かせたケヤキをろくろ細工して茶筒を製作する野原さんと木目が美しい茶筒



▲木と音にこだわる野原さんが趣味で製作している木製スピーカー



商売抜きで木にこだわる趣味人の野原さんだが、商品化して工房の新商品として人気を博しているのが、さまざまな木を使って作った木製ボールペン・シャープペン。10〜15mm 径に削るといって、ろくろ細工でも最も熟練を要する作業だが、いまでは息子の一浩さん（31）がマスターして、妻籠宿でのろくろ実演会場を湧かせている。

野原工芸は祖父・野原三蔵氏が明治時代にごこ南木曾で木挽き屋を始め、父・保氏のもとで廣平さんが働くようになった20数年前に（有）野原工芸として組織化した。廣平さんで三代目となり、今は息子の一浩さんもろくろ細工職人として活躍している。

木地師の心意気を伝承する 南木曾ろくろ細工の特徴

ろくろを挽いて盆や椀等を作る木地師は、第55代文徳天皇（858）の第一子稚喬親王の従者小椋、大蔵氏の末裔だと言われ、南木曾木地師の里にも同姓の家があるという。宝永元年（1704）頃には木地師の荷が大阪方面に出たという記述があるが、木地師の里として賑わうようになったのは、明治になり江戸幕府の御料林だった木曾山が払い下げられてから。明治13年に挽物用のトチ、ケヤキ等を求めて13戸が漆畑に移住してきたという。

「木地師とは全国各地の樹木を伐る免許証を持った統領のことで、この木地師は滋賀県の東近江市を出て、天竜川沿いを登ってきた。飯田から大平峠を越えて漆畑に定住したと聞いています。木曾は杉やヒノキの他にも樹齢数百年の広葉樹が茂る最高の森林地帯で、木地師たちはここでさらに技を磨き、ろくろ用の新動力も開発して生産性を高め、製造販売までを行う一大産地になりました」

南木曾ろくろ細工は、木の個性や特色を引き出した完成度の高い製品を作るために、選木、木取りから塗装に至るすべての作業を一人の熟練職人が行うこと、原木をろくろで回しながらカンナの刃を当てて、木目の美しさを彫り出すのが特色だという。

仕上げた木製品には、「トクサ磨き」による木目を活かした白木製品と天然漆を磨りこんで磨く「漆拭き」があるが、木の素材さと木目を最大限活かすことをめざしている。

木を養生して商品に活かす

店の裏手にある工房へ案内していただいた。庭先で、いきなり樹齢数百年という巨大な樹木の切り株を見てびっくり。南木曾町と大桑村の境にある恋路峠の山奥に生育していた樹齢600年の榎（ツガ）の木だそう。幹直径1.3m、樹高20mあったが、安全性に問題があるため伐採して組合が購入、4mずつに切断してクレーン車で運んだという。

「榎の木は針葉樹の中では硬くて重量感がある。木目もきれいなので、どう加工するか楽しみです。だいたい先になります」と野原さんは愛しそうに老木の幹を撫でる。



▲工房の庭に置かれた樹齢600年の榎の木
▲上／丸く成形して4〜5年間乾燥・養生しているケヤキ等
下／木製ボールペン用にカットして保管する木々。貴重なものが多く、重厚で硬く金属を感じさせるものもある



工房は二階建てで、一階は製材やろくろ細工用の機器がところ狭しと設置され、二階は床に通風をよくするために金網を張り、膨大な量の木材が収納されている。

野原工芸の代表的商品の茶筒の材であるケ

◀妻籠宿で木製ボールペンのろくろ実演をする
野原一浩さんと熱心に見守る観光客たち



ヤキは、製材、荒挽きをして乾燥・養生している。

「当家では精度の高い茶筒を作るために4～5年は寝かせます」と野原さん。

木製ボールペン用の材は60種以上あり、ペン用のサイズに成形されて引き出しにぎっしり収納してある。孔雀模様がある黒柿の板、土の中に眠っていた神代ケヤキの板等、希少価値の高い大変貴重な材もある。

素人である私たちが見ても判りにくいが、これらの材がろくろ細工され磨かれると、木の命や個性が見事に蘇ってくるのだろう。

一階へ降りて、茶筒のケヤキをろくろ機器にかけて実演してくれた。木目や蓋との調和を見ながら5mm幅程の厚さの筒に素早く製作していく作業で、かなりの熟練が必要のようだ。特に野原工芸の茶筒は、二重構造になっているため、蓋を閉めると自然に空気が排出されるため、機密性と木特有の吸湿性により最高の状況で茶を保管できる。筒と蓋の木目がぴ

たりと合っているのも自慢だ。

木の魅力を手先に、木製ボールペン

野原工芸の木製ボールペンはまるで木の見本帳を見るようで、その種類は60種を超える。

木材の魅力を最大限活かした新製品で、高級万年筆のようだ。若い人に知ってもらおうと、土日や祭日には妻籠宿「ふれあい館」で実演販売をしており、主に一浩さんが担当している。

休日でも賑わう妻籠宿を尋ねた。

一浩さんは国立高岡短期大学(現富山大学)産業工芸学科を卒業、飛騨の工房で働いた後一年間渡欧して学び、3年前に帰郷した。いまでは緊張感を要するボールペン・シャープペンのろくろ細工も父親をしのぐほどの腕前となり、妻籠宿では若い職人の仕事ぶりを熱心に見守る女性の姿が目立った。

あるメーカーと提携して長年研究開発してきたもので、木工旋盤にペン用木材を取り付

けて厚さ10～15mmに削っている。贈答用にする人には名前入りのサービスもあり、替え芯等のメンテナンスにも気配りをしている。

一浩さんのブログによれば、22年度のボールペンで人気の木は1位が槐、2位がケヤキ、3位が桑とパープルハートという南米産の紫色の木だった。

一浩さんの横では母法子さんが見学者の説明や包装に追われていた。「木にも沢山の種類があり、木目や色の違い、木の質感を味わってもらえればと思います。使うほどに色艶が出て手に馴染んでいきますので愛着が湧くと思います」と語る。

一方、法子さんと祖母富士子さんは、木曾で伝承されてきた「ねこ」という綿入り半纏を地域おこしに役立てたいと、暇をみては針仕事に余念がない。ねこはろくろ作業の際も手元が邪魔にならないため冬の防寒着として愛用されてきた。生地も柄も豊富で、各地特産の紬も使用、男性用から子供用もある。取材にお伺いした日は近所のお年寄りが来て、富士子さんとねこ作りの打合せをしていた。各店や妻籠宿でも売られるようになり、店頭に暖かい雰囲気をかもし出している。

◀ねこの製作が楽しく
富士子さん(店頭で)

▼木肌の美しさは高級
万年筆のよう



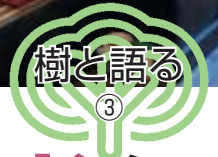
文／横田塔美 写真／小林恵

●(有)野原工芸 ☎0264-58-2330
web/www.nohara.jp
●南木曽ろくろ工芸協同組合
☎0264-58-2434

和菓子処「早撰堂」の店舗奥にある居間。店の椅子に座って茶を飲みながら菓子を食することもできる



村上市は鮭、地酒、北限の茶、岩船米等、新鮮な山海の幸で知られる城下町。伝統ある町屋作りが特色で、各家が代々受け継いできた人形や屏風、民具等を展示公開して町屋の魅力をPRしてきたが、一方でシャッターを下ろす店も増えてきた。そこで町屋を再生しようと市民による「むらかみ町屋の外観再生プロジェクト」が平成16年にスタートした。21年までにすでに15軒が再生され、昔の風情ある街並みが蘇りつつある。



シャッター街NO! 風情ある城下町に むらかみ町屋再生プロジェクト

(新潟県村上市)
むらかみし

城下は活気ある越後の商人街に

村上市の市街地の東部に「お城山」と呼ばれる臥牛山(標高135m)がある。天然の要塞として戦国時代に築かれたというが、城が近世城郭として形をなしたのは村上頼勝、忠勝と城主が代った後、1618年に入城した堀直寄の時代で、天守閣や櫓等を建設し、城下の拡張にも力を入れた。城下町の整備はこの時ほぼ完成したが、堀家は後継ぎに恵まれず断絶し、以後幕末までの300年で松平氏から内藤氏までに7人の城主が入り替わった。その間町は、越後と鶴岡・酒田を結ぶ商人街として発展した。城下を見続けてきた城だが、明治元年に新政府軍に追い込まれた村上藩は、開け渡しに無血の道を選んだ。現在は石垣を僅か残すのみとなっている。

お城山の麓には、当時の武家屋敷を再生して村上市郷土資料館、村上歴史文化館、若林住宅(重文)、成田家住宅等があり、市役所や公民館、体育館もその一角にある。

その西側に広がるのが旧町人町と呼ばれる商店街で、小町から大町、上町を経て羽黒神社に至る東西に伸びる商店街と、大町から鍛冶町、観音寺に至る南北の道路に沿った商店

街をメインに、幾つもの路地がある。

JR奥羽本線村上駅から旧町人町までは東へ徒歩で10〜20分程あり、駅の西部・日本海寄りには絶好のロケーションと豊富な湧出量を誇る瀬波温泉と観光施設、また街の北部を悠々と流れて日本海にそそぐ三面川は、鮭が遡上してくる美しい川として知られ、村上市は平安時代より鮭を特産品として栄えてきた街でもある。

ひと昔前に タイムスリップ、 町屋建造物

「町屋」とは城下町の旧町人町の家屋で、間口は狭いが奥へ長いうなぎの寝床^{うなぎのねど}的な家で、雪国の民家特有の太い梁や大黒柱、囲炉裏、神棚、仏間等がある。囲炉裏のある吹き抜けの居間からの眺めは明治、大正時代にタイムスリップしたようで、木の重厚な柱や家具・調度品は各家の



◀城下町情報館の再生した店頭と、うなぎの寝床のように奥に長い町屋の家



歴史や、きめ細やかに手入れして暮らしてきた人々の想いが感じられる。家具調の階段を登った二階の居間や仏間は粋な和室。さらに、鮭の製造販売、茶や菓子屋等の店は、奥に広い製造工場や収納室があり、城下町として繁栄した頃の面影が息づいている。

村上では商店主たちの呼びかけで町屋の内部を公開してきた。3月の「町屋の人形様巡り」、9月の「町屋の屏風まつり」がそれで、全国から観光客が訪れるようになり、2カ月間で10万人以上がやってくる。他にも7月には400年の歴史を語る「村上大祭」、10日には「宵の竹籠まつり」等があり、2と7の日には野菜や魚、特産品を売る「六斉市」で賑わい、骨董市で訪れる人も増えている。

しかし町屋内部は生活の場として現存しているが、外側は新しい建材で変更したり、店をたたんでシャッターを下ろす店も多くなってきたため、城下町らしい景観が失われてきた。そこで市民自らが立ちあがって平成16年にスタートしたのが「むらかみ町屋再生プロジェクト事業」。外観を昔の姿に蘇らせ、商店に活気を取り戻そうという運動で、一般会員一口3000円の年会費を基金に、再生する商店も出資して、5年間で15軒の外観を再生した。同時に黒塀を復活する「黒塀一枚千円運動」も行われ、現在360mの黒塀が再生している。

これらの活動は行政に頼らず市民、企業、各団体の協力で実施されており、平成20年には都市景観大賞「美しい街並み大賞」(国土交通省)、新潟県自治活動賞、21年には内閣総理大臣賞「あしたのまち・くらしづくり活動

賞」を受章している。

格子戸や看板の変更で大きく様変わり

「むらかみ町屋再生プロジェクト」の取材で待ち合わせ場所になっている「城下町情報館」を訪ねた。待っていてくれたのは同プロジェクトの理事で建築設計事務所を経営、木造住宅耐震診断士でもある小池昭雄さんと村上古建築研究会の副会長、匠の会会長を務める大工の川内誠さん。城下町情報館は細野家の住宅だが、しばらく空家になったため、会に貸してくれた家。会では2年かけて壁の新材を撤去して杉板を張り直し、窓も格子戸に再生、内部も徹底的に整備した。平成18年から町屋、資料館として一般公開。玄関を入ると、館のガイド役も兼ねて、伝統工芸士の川上健さんが村上木彫堆朱の実演を行っている。(38頁参照)

間口は狭いが奥行27mもある典型的な町屋造りで、中央に吹き抜けの居間がある。

「町屋は大抵、表通りから裏の道まで通り抜けられるように出来ています。居間と玄関は吹き抜けが多いのですが、寒いために天井をつけて塞いでしまう家も多く、そうなる通風が悪くなり、家が傷みやすい。さらにシャッターを下ろし空家にしてしまうとせっかくの町屋も台無しになってしまいます。この家も空家でした」と語る小池さんは、東京の建設会社で働いていたが、友人を訪ねて村上に来た時この城下町が気に入って、昭和49年に移住してきた。町屋の改装を長年手がけてきた経験を活かし、むらかみ町屋再生プロジェクトでは、再生したい家の外観を診断して再生



案を分かりやすくスケッチして示し、打合せを綿密に行っていくという。

「町屋の中は江戸や明治のままで素晴らしいのに、外観はアーケードやサッシ、トタン等で覆ってしまったので、外観を昔ながらの格子戸や壁、ガラス戸に変えて町屋の景観を整えようとプロジェクトがスタートしました。長年町屋を手掛けてきた地元の名工、村上大工の方々の協力で、少し手を加

えるだけで見違えるほど雰囲気の良い店になり、その結果客も増えて活気が出てきました」

大工の棟梁・川内さんは「村上の町屋は豪



▲上/設計担当の小池さん 下/大工の川内さん
◀「むつ川」の建物と再生プロジェクト会長でもある吉川真嗣さん。左/町屋民家を活かした店内

▶菓子処「早撰堂」の再生した外観と店内。
格子の奥には居間、菓子の木型も装飾に活用
▼早撰堂の奥さんと語る川内、小池さん



▲地酒「大盛」が人気の益甚酒店と地酒に詳しい番頭さん



▶▼鯛車文庫の内部と鯛をシンボルに施した外観（鯛車は昔から幼児が引っぱって遊んだ玩具）



雪にも耐えるようにいい材を使っています。二階の通りに面した部屋に座敷があり、祭りの時などは恰好の見学場所になります。襖も

調度品もいい材で丁寧に造っています。

外観の再生では看板を昔風に替えたり、格子や手すりを昔ながらの木のものにする、暖簾をつける等の低コストな改善で様変わりしてきます。古い看板のかまぼこ金文字の復元では横浜の業者に頼んだが、他は我々地元大工ならお手のものです」と語る。

再生プロジェクト設立の契機になったのが代々伝統の鮭製造と販売店を営む「味匠 菘川」。若主人・吉川真嗣さんのアイデアで、平成10年に店の外を板壁や和紙障子張りの昔

風の外観に改装、店内は町屋造りの空間と特色をそのまま取り入れ、仕事場も居間も公開するようにした。連日店は、見学を兼ねて遠くから来る観光客で賑わっている。真嗣さんは同プロジェクトの設立を呼びかけて奔走し、会長も務める多忙な日々を送っている。

もうひとつ、「シャッターを下ろさない!」「再生したら活用する」というのも活動の重要なテーマで、メイン通りにありシャッターを下ろしていた店舗は、お洒落なガラス戸張りの喫茶店に変身し、今ではお年寄りから若者まで客で大賑わいする交流の場になった。住人のいない家は再生して「鯛車文庫」という誰でも利用できる図書館になっている。このミニ図書館には市民が寄贈した本や雑誌が沢山並び、城下町村上を情緒ある元気な街にしたいという市民の熱い思いが伝わってくる。

頑張ろう、店に活力が出てきた

再生一号店となった和菓子処「早撰堂」と地酒を販売する「益甚酒店」を見学させてもらった。早撰堂は二階のサッシ窓を格子戸に、屋根を昔風の瓦に葺き替え、明治頃に使って

いた看板を資料を見て復元した。店内も和菓子づくりに使ってきた木型を公開したり、菓子入れに使ってきた古いガラス瓶も活用する等、アンティークな工夫が随所に見られる。店の奥にある町屋造りの居間も見ることが出来る、店に入るだけで楽しくなってくる。

「再生してお客さまも増えました。私たちこそ頑張らなくちゃあと和菓子作りにも精が出ます」と奥さんは言う。伝統の手造り銘菓の中に、鮭をテーマにしたラクガンも復活した。「菘川」の隣にあるのが「益甚酒店」。村上の酒屋10軒が協力して米作りから手掛けて開発した地域限定の日本酒「大盛」越後流等を販売しており、店は造り酒屋時代の格子戸に復元した。遠くから買い求めに来るファンも増えたそうで、明るく落ち着いた店内。3月には奥の居間でお雛様を飾って公開している。

「再生した店が皆活力が出て成功していることが何より嬉しいですね。目標は120軒、まだまだ頑張ります」と小池さん、川内さんは言っていた。

文／浅井登美子 写真／満田美樹

●むらかみ町屋再生プロジェクト事務局(菘川内)
☎0254-53-2213
http://www.mmsp.info



三津谷煉瓦窯で作業する人たちと
炎が舞う内部



炎への挑戦①

近代化産業遺産の登り窯が復活 三津谷煉瓦窯再生プロジェクト （福島県喜多方市）

経済産業省の「近代化産業遺産」に認定された喜多方市岩月の登り窯は、新潟県安田の瓦職人・樋口市郎により、明治23年に開かれた。現在の登り窯は2代目・喜市が大正時代に築いたもので、現役の煉瓦焼成が可能な大型の登り窯としては、日本唯一のものといわれている。

平成20年、喜多方市民の有志が結集し、この登り窯を再生し、煉瓦を焼こうと「三津谷煉瓦窯再生プロジェクト」が立ち上がった。

経験知が炎をとらえる 煉瓦作り

大正時代に築かれた全長18m、全幅5.1mの10連房式の登り窯——今、7つの窯に煉瓦が積まれている。その数5000個。

火入れは12月17日昼。50時間余りたった19日午後3時、炎は4つ目の窯に達し、その温度をじわじわと上げ続けている。温度調節のため、数人の男たちが、窯の左右両側にある小さな穴から炎の状態を見、入口の粘土壁に埋め込んだ温度計を確認する。

「800℃からちよつと下がった!」

「もうちよつと待った方がいいかな」

「でも、炎は回ってない」

「じゃあ、とりあえず3本入れましょう」

窯の両側の入口から同時に、長い薪が3本投げ込まれた。温度計の数字は窯端の温度で、

中央はそれより100℃近く高いという。窯の温度は、最終的に炎の勢い、煙、煉瓦の色などで判断し、薪をくべるタイミングを計らなければならない。

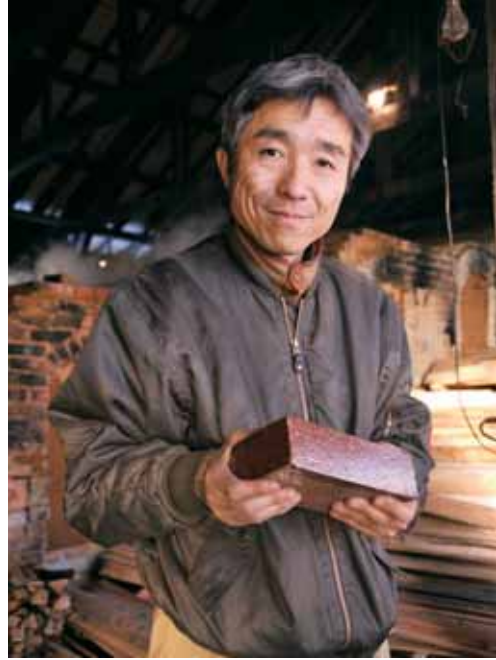
通常、薪で焼く煉瓦の焼成温度は約900℃だが、釉薬がかかっている喜多方の煉瓦には、1100～1200℃は必要だ。また、厚みのある煉瓦は熱容量が高く、蓄熱に時間がかかる。

「1年目はこれで大失敗しました。急速に温度が上がったのはいいけれど、上の窯の温度



▲温度が逃げないように、窯口はしっかりと粘土でふさぐ
▶薪を一気に放り込むのにも、力がある。





▲山形県大石田町に窯を開いているフランス人陶芸家・ブルーノ・ピールさん。ボランティアで毎回参加している
▶金親文史さん、皆で焼いた煉瓦を手。「これで2.7kg。焼く前は3kgありますから、片手で釉薬をつけるときはたいへんです」



▲「アナログ窯だからふぞろいで、ムラがある煉瓦ができるけれど、それが味ですな」と話すプロジェクト事務局の星宏一さん

窯口を守るプロジェクト実行委員会副委員長
の金親文史さん。当初、プロジェクトの参加者のほとんどが未経験だったという。「樋口窯業3代目の憲一さんに教えを請いましたが、頭で理解しただけでは仕事にならない。あまたの修羅場をくぐり、失敗という失敗を経験しました(笑)」。話の合間にも、常に窯

ばかり気にかけていたら、下で焼かれた煉瓦が急速に冷えて、上の窯の熱が引つ張られてしまった。一番下の窯は、じつくりと焼き上げて煉瓦に熱を蓄えさせないことだ

樋口窯業創業者・樋口市郎は、味噌・醤油醸造元・若喜商店に働きに出た際、三津谷の土地に惚れ込み、明治23年、窯を開いた。良質な粘土があり、燃料となる松が林立し、登り窯に必要な自然な傾斜があったからである。明治13年の大火以来、喜多方では防火意識が強まり、瓦屋根や蔵の需要が高まった。市郎は、防火性が高く、雪に負けない防湿性を考え、煉瓦に益子焼の釉薬を施した。これが、

「用の美」が創りだす 喜多方の景観

薪をくべるごとに、窯の中は酸化と還元を繰り返す。還元状態で煉瓦は渋く色づき、酸化状態で赤みを帯びる。灰が舞えば釉薬を変化させ、炎が創り出す風合いができる。コンピュータ制御で火力を調節する量産品と違い、一つとして同じ煉瓦は焼き上がらない。煉瓦の焼き上がるのは明け方近く。焼きしまった煉瓦と対面できるのは5日後である。

の状態に目を光らせる。「炎が白っぽくなると、次の窯の景色が薄赤くなる。これが次の窯に作業を移すきっかけ。釉薬が溶けるとガラス質になって、炎が反射して光ります。それが焼き上がりの目安」。3年間に4度の煉瓦焼成の体験がもたらした経験知である。

喜多方の煉瓦の特徴であるあずき色の渋い色合いの源となる。漆喰の蔵より工期が短い上、漆喰同様の通気性や防火性がある煉瓦蔵は、町に多く建てられ、落ち着きのある景観をつくりだした。

稼働を停止した後も、独特の風合いをもつ煉瓦を懐しむ人は多く、平成19年に、登り窯が近代化産業遺産として認定されるに至り、その保存再生の機運が高まった。この追い風をつかもうと、平成20年、再生プロジェクトの活動が開始された。目的は、登り窯で実際に煉瓦を焼成し、その技術やノウハウを習得・記録して次代に伝えることである。活動は3年間とし、資金には県の「地域づくり総合支援事業」による助成金をはじめ、協力・寄付金を充てた。

焼成前の煉瓦素地は、樋口市郎ゆかりの新潟県安田町から成型されたものを求めた。釉薬をかけ、焼成する作業には、地元工業高

◀市内からほどちかい岩月町に明治23年、窯が開かれた



校の生徒も含め、延べ400人が協力。そのボランティア支援は現在も続いている。焼成した煉瓦は、喜多方市内では観光案内所のトイレのフアサード(入口)などに使われているが、市内にある煉瓦蔵にも劣らない出来栄だ。今回焼き上がった煉瓦も、市内の橋の欄干に一部使用される。

「再生」から「継続」へのアプローチ

「理屈ではない面白さがあります。単純なようで単純でないところがいい」

「簡単にできたら、こんなに夢中にならない。思うようにならないところが魅力かな」

参加者が、作業の魅力を語る口ぶりの奥に、「大人の男の楽しみ」を感じる。

プロジェクトは今回の作業で一応終了だが、「老朽化した今の窯では、補修に時間をとられます。新規にコンパクトな窯を造れば、頻繁に煉瓦を焼くことができるのですが」と話す金親さんたちには、次の構想が浮かんでいる。新規の窯とともに、作業場を設けて地元で土で煉瓦を成型し、一貫した煉瓦生産体制のもとで年数回生産したいという。「新しい窯には、消耗の激しい場所に耐火煉瓦を用い、それ以外は自分たちが焼いた煉瓦を使いたい」と夢は広がる。予算づくりも含め、じっくりと次のステップにつなげる考えだ。

喜多方市では、平成22年度事業で、蔵が立ち並ぶ通りのアーケードを撤去した。老朽化が主な理由だが、おかげで、通りに面した蔵の全景を楽しめるようになった。

その中の一軒、明治44年に完成した金田洋品店は、店蔵としては

喜多方市内で最も古い。明治の終わりに「洋品店」と名づけたところに、当時の喜多方の人々の清新な気分が想像できる。その後、シャッターやアーケードが設置されたため、入口の煉瓦のアーチが見えなくなった。今回、アーケードがなくなつたことを契機に、シャッターボックスも撤去するという。もうすぐ、建築当初のきれいなアーチ

のデザインが全貌を現す。

渋い色合いの煉瓦が、喜多方の落ち着いた景観を印象づけていることを考えれば、煉瓦自体が地域の得難い財産である。窯の火を絶やさずに、少量でも手作りの煉瓦を作り続けることが、まちの歴史と文化を継承していくことにつながる。煉瓦の再生とともに、蔵のまちは「新鮮な古色」とでもいふべき景観を見せてくれることになりそうだ。

文／村上憲加 写真／小林恵

●三津谷煉瓦窯再生プロジェクト事務局
(特定非営利活動法人まちづくり喜多方)
☎0241-24-4541



▲プロジェクトメンバーのひとり・市産業部商工課の大崎友和課長。焼いた煉瓦を利用した建物を前に。「炎を見ると落ち着きます」と煉瓦作りの魅力を語る
◀登り窯の覆屋の外観



▲上／明治38年、喜多方市内で、最初に建てられた若喜商店煉瓦蔵。下／ハイカラな蔵の壁面の「金田洋品店」の切文字。100年の時を刻む

1300℃の炉で鎌の焼き入れ
(富士源刃物製作所)



温暖多雨地の土佐国は古くから良木に恵まれ、多くの木材を大和や京等へ搬出してきた。それに伴い山林伐採に必要な打刃物うちばものが造られ、刀鍛冶技術が発展してきた。鋭い切れ味と優れた耐久性を持つ伝統的な刃物。数百年経た今も、真っ赤な炉で焼いては成形、鍛造を繰り返すという手造り鍛冶が行われている。伝統の鎌製造に加えて、子供たちも楽しく使える「クジラナイフ」を開発・製造する富士源刃物製作所の山下哲史さんと、機械化しながら若い後継者育成に当たる宗石工房・宗石博孝さんを取材した。

炎への挑戦②

土佐の匠が鍛え上げた伝統の切れ味 土佐打刃物

(高知県香美市
土佐山田町)

伝統的工芸品産地指定に

土佐打刃物の歴史は、鎌倉時代後期の徳治元年(1309)に大和国より刀鍛冶の五郎左衛門吉光派が土佐に移住してきたこと始まる。五郎左衛門らは戦国乱世期の武具刀剣の需要に比べると共に、農・山林用刃物鍛冶にも力を入れていった。土佐山田に鎌を普及したのは小笠原円蔵という匠だったという。天正18年(1590)の土佐一国を総地検した長宗我部地検帳によれば399軒の鍛冶屋がいたと記されている。

土佐打刃物の本格的な製造は江戸時代からで、財政振興策として土佐藩は森林資源の確保や新田開発を遂行、それに伴い土佐打刃物の生産量と品質は格段に向上していった。

江戸時代の切磋琢磨の技術と伝統鍛冶は、現在は多少の機械化を取り入れながらも受け継がれ、平成10年に経済産業省より伝統的工芸品産地の指定を受けた。日本刀の鍛冶技術から生まれた秘伝を受け継ぎながら、それぞれが製品や用途に応じてプレスやハンマーを使って鍛造加工する「自由鍛造」が行われている。最近では「自分のための刃物」を求めて注文してくる人が多いという。

しかし現在農林業作業はコンバインやチェーンソー等を使つての機械化が著しく、手作業を主体にした鎌や鋤等の大口需要は年々減

少しているのが現状だ。今回の取材でガイドしてくれた香美市商工会経営指導員の門田貴司さんは「昭和40年頃までは200軒近い鍛冶屋がいたんですが、いまは50数軒、従業員は200人程になっています。土佐打刃物の特色である森林作業用の鎌、鉞つるぎ、斧等の需要が減っているせいですね。一般向けに包丁や鎌、ナイフ等を作っていますが、製品によって一本何千円から何万円の違いがでてくる。使い手がその良さをわかってくれないとダメですね」と言う。



▲刃物祭りと同開催される「山田のかかし祭り」
◀上/土佐打刃物流通センターの建物。3000点の刃物を展示販売している
下/香美市商工会経営指導員の門田さん(左)とセンターの田村有三専務理事

門田さんが最初に案内してくれたのが、協同組合「土佐刃物流通センター」。

組合員の製作した商品がジャンル毎にほぼ全種展示販売され、希望者には実演もおこなっている。同じような鎌や庖丁でも、白鋼、青鋼、スーパーステンがあり、刃には片刃、両刃があり、柄やケースもいろいろ。専門家やマニアには興味尽きない世界だと思われる。

自分の手で、納得いくものを作る 子供にも人気の「クジラナイフ」

土佐打刃物の代表商品である鎌を中心に製造してきた富士源刃物製作所は、奥まった集落の山を背景にした道路沿いに工房があった。経営者の山下哲史さん(62)は、鋼・鉄造りから仕上げ研磨、柄付けまでのすべての作業を一人で行っている伝統工芸士で、朝早くから炉に火を入れ、鎌造りを行っていた。

鎌の大きさに応じた鉄の棒が用意されていて、その鉄棒を1000℃以上の炉で焼いてハンマーを使いながら叩いてやや平たくし、鋼を真ん中に重ねて、また焼いて鋼鉄を作る。真っ赤になった鋼鉄をさらに叩き伸ばしながら鎌の形に成形していく。鋼の比率は普通の鎌では1割だが、灌木を切る鎌の場合は25%にするという。

「刀と同じで、鍛えることで金属組織が細かくなり、切れ味、耐摩耗性、刃の粘りが強化されていくんです」と山下さんは穏やかに説明してくれる。

軟鉄を叩いて割り込み、高温で沸し付け(鍛接)を行い、プレスで切断する。そのあと鎌の形に合わせて「整形」し、さらに焼いて叩



▲炉で鉄棒を焼く
◀焼いた鉄に鋼をいれて、また焼きのばす山下哲史さん



いていく鍛造を行う。叩くと表面の鉄屑がとびちって離れ、精度の高い金属に仕上がっていく。鎌は両刃が多いが、片刃の場合は鉄と鋼のバランスが難しく焼き入れに神経を使うという。

鍛造に使うプレス機やハンマー機は使い込んだ重厚な鉄の塊で、山下さんが足で踏むと回転するように出来ている。それぞれの鍛冶屋が商品に合わせて特注したもの。富士源刃物製作所では炉の燃料にコークスやLPガスを使っている。これらの用具一つひとつに歴史があり、使い手の息遣いが感じられる。しかも、1000℃を超える炎の鉄を相手にして



▲成形された鋼鉄の鎌



▲▼天然砥石をいろいろ使いながら刃先を磨いていく



▲焼いた鎌は素早く鍛える



▲子供も安心して使えるクジラナイフ

▼山下さん特製の造園用鎌





瞬間に製錬していく緊張する作業だ。鍛冶職の凄さを改めて感じた。仕上げ用の研磨にもいろいろの砥石を使う。もう現在では入手困難な天然砥石だ。水を打ちながら研磨していくと、くすんでいた鋼鉄

が光を放ち始め、刃先が鋭くなっていく。山下さんの刃先を押さえている指先は刃の切れ味を的確に感知しているようだ。砥石を使う仕上げ作業は5年は修業が必要と言われ、今も専門家に任せる鍛冶屋が多いと聞く。

この工房は山下さんの父親が昭和15年に独立開業したもの。山下さんは30歳の時、父親の仕事の後継しようとして二代目鍛冶職人になった。以前は従業員もいたが今は一匹狼、伝統工芸士の資格を取り、8年前に「土佐の匠」に選ばれた。

「30年前には鎌が飛ぶように売れましたが、いまは需要が大幅に減って大変です。そんな

時、子供が安心して使えるナイフが欲しいという母親の話を聞き、考案したのがクジラナイフです」

クジラナイフは10年前前に試作。子供が使えるようにと角を丸くし持ちやすい形にした。クジラの形になった。子供たちの野外活動を指導するインストラクターからもアドバイスをもらい、用途に応じて各種のナイフを製作するうちにマッコークジラ、ミンククジラ、ナガスクジラと種類が増え、現在山菜ナイフを入れて10種以上を製造している。

当初は自分で成形して焼いていたが、形にバラツキが出てしまうため、今は鉄工所に依頼し、鋼入りの鉄板をレーザーでクジラ型に切断してもらっている。焼き入れから仕上げ砥ぎまで、手間のかかる細かい作業だが、子供の頃から刃物の魅力と使う生活に親しんで欲しいと、山下さんは一本一本丁寧に製造している。平成7年、第一回高知お土産品コンクールで佳作に、16年の「全国むらおこし展」では経済産業省大臣賞を受賞した。

各種庖丁から鉋なたまで 特注による「自由鍛造」も

市街地のメイン道路を路地にはいつて行く。と石垣の下に鍛冶屋らしい大きな建物が見えてきた。重厚な機械がところ狭しと並び、昼食を終えた従業員たちが時々火花を散らしながら作業をしている。

宗石工房は、昭和30年に先代が創業、宗石博孝さん(55)は二代目で、社員は4名。「子供の頃から鍛冶をする父親の仕事を見て育ちましたが、父は私が30歳を過ぎた時、58歳で

病気になるりましたので、それ以来私が引き継いでやっています。林業用の鎌、鉋なた、斧等を得意としてきたのですが、今は需要が減っていますので、庖丁が主体ですね」と宗石さんは言う。事務は奥さんの恵さんが担い、インターネットによる通信販売も行っている。

庖丁をはじめとして大鎌、鉋、斧等の林業用の刃物等を幅広く製造しているが、「土佐宗石作」の銘を入れた庖丁と共に、別の銘入りや絵柄の入った特注品もあり、発注者の要望に応じて製造する「自由鍛造」の工房でもある。それを語るように、工房の中央部には成形した刃物が沢山入った箱があった。これは何だろうという初めて見る形のものもある。



▲宗石工房で製造されている鎌、斧、鉋等
▶火作りをする宗石博孝さん



宗石工房の建物。石垣を設置し、左手に長い

宗石工房が製作する庖丁は大きく分けて6種で、一般家庭用の船行庖丁、三徳庖丁、出刃庖丁の他に、菜切庖丁、魚切・刺身専用の柳刃包丁などがある。北海道大根切り庖丁、蕎麦庖丁、カツオ解体専用庖丁もあると宗石さんが説明してくれる。

鉋も種類が多く、枝打ち、竹打ち鉋から、刃先が乱れ刃になっている狩猟用鉋、腰鉋、剣鉋がある。「数は少ないんですが、全国各地の森林業者さんから毎回特注される鉋や鎌があり、やりがいがあります」

その鉋造りの成形を見学させてもらった。大型炉が2基あり、重油が炎を上げている。焼いて取り出した真っ赤な鉋を大きなハンマーを使いながら叩く。小鎌と違って鉋や斧は分厚くて重い。そのため圧力をかけながら手早く鉄のかたまりを伸ばしていく作業が行われる。

鍛造・成形したあとは荒研ぎと泥ぬりし、再び炉に入れて焼き入れ・焼き戻しをして、歪み等を取り、刃付け仕上げを行う。プロが生涯使って欲しいと入念に

最高のものを造る。もし柄が取れたり刃が欠けたりした時は直ちに修理し、日頃のメンテナンス・サービスマンにも力を入れていこう。 「鉋にも刃の先端が出っ張っている剣鉋、柄の長い共柄鉋、石突鉋などがあります。石突鉋は木を割ったりした



時、石などで刃先を痛めないように作ります。森の状況や作業によって道具も異なってきました」

鍛造・成形の作業は3人の若い職人さん達が行っている。廻っている研磨機に刃物を当てると火花が飛ぶ、顔をガードし両手でしっかりと押さえながら正確



に的確に行うことが求められる作業。4〜5年の修業が必要だというが、「まだまだ、学ぶことがいろいろあり、奥が深い仕事です」と一人が言っていた。

ハートも熱く未来をめざして 創造集団「ZAKURI」

協同組合土佐打刃物流通センターは昭和59年に設立し、61年に現在の土佐山田町上改田に事務所、店舗、倉庫を移築新設した。センターでは家庭用、プロ用庖丁から各種の造園・造林刃物、アウトドア用品まで3000点が販売されている。平成元年には青年部を結成して後継者の育成や新製品の開発にあたってきたが、若い後継者たちが中心になって10年前に結成したのが「ZAKURI」。



▲特殊な庖丁
▶火花が散る中で成形・研磨をする若い職人さんたち
▼砥石で刃に磨きをかける宗石さん



伝統の技を受け継ぎ、未来派としての土佐打刃物をめざす有志団体で、協同組合理事長の山崎洋介氏が同会の代表理事を担っている。合言葉は「頭も切れるし刃物も切れる。切っても切れない人間関係」。切れ味のいい刃物を造りながら人間関係も熱く築いていこうという趣旨で、地域活動やイベントにも積極的に参加している。その一つに、不要になった刃物を無料で供養する「刃物供養祭」がある。供養処分の他に、刃物の砥ぎや修理、再生品オークションも行われて、人気を呼んでいる。

センターの一角には、会員の主婦たちが手造りした和紙や布製の可愛い人形やアクセサリ等も置かれ、クールな売り場に暖かい雰囲気をつくっていた。

文／浅井登美子 写真／小林恵

- 土佐打刃物流通センター ☎0887-52-0467 www.tosahamono.or.jp
- 香美市役所商工会(高知県土佐刃物連合協同組合) ☎0887-53-4111
- 富士源刃物製作所 ☎0887-53-4508
- 宗石工房 ☎0887-53-3275

▶機織り作業をする酒井モト子さん
機は村の大工さんが作ってくれる



邪馬台国の記述で知られる『魏志倭人伝』にも「苧麻」の名で登場する「からむし」。イラクサ科の多年草で、北海道を除く全国に群生し、衣料の原料として各地で使われた。軽く、通気性・吸湿性に優れた素材である。

とくに越後・会津・出羽地方は良質なからむしの産地であったが、現在、本州でその栽培・生産技術を有している地域は唯一、福島県昭和村だけである。人口1500人足らず。雪深い静かな山村に、良質なからむしと確かな生産技術が継承されていた。



本州唯一、栽培・生産技術を継承する からむし織の里 (福島県昭和村)

若き織姫たちが継承する伝統の技

師走も半ば過ぎ、昭和村はすでに深々とした雪の中にあつた。「からむし織の里」の拠点となる織姫交流館、からむし工芸博物館も冬支度を終え、建物には雪囲いがされていた。

織姫交流館に入ると、右手に研修や織物体験のできる部屋があり、手織機が何台も置かれている。左手にはからむし織の作品や、地元の特産品が展示販売されているホールが広がる。ブラウスやシヨール、ハンカチーフなどが、透けるほど繊細に織られた「からむし織」が、透明感ある輝きを放っている。

展示スペースの奥にある畳のスペースでは、若い女性が二人、糸づくりを行っていた。彼女たちは「織姫体験制度」の研修生である。高齢化・過疎化の進行による後継者不足を懸念した村は、からむしの栽培・技術の継承を目指し、平成6年から、全国へ「織姫体験生」の募集を始めた。

現在は「織姫・彦星制度」に発展し、毎年5月上旬から翌年3月31日までの11カ月間、からむし焼きに始まり、刈り取り、糸作り、織りに至る「からむし織」の一連の工程と山村生活を体験する。体験にかかる経費は村がもち、生活費は自己負担する条件で、3月には高機たかばたによる平帯一本を仕上げる。体験終了後も、からむしの調査研究や技術習得を希望

する者には、研修生として最長3年間、生活費の援助を行い、村内に在住できる制度である。



◀右上／からむし工芸博物館。からむしの歴史や資料、織り物を展示している
右中・下／織姫交流館内部
左／織姫体験制度の研修生。左から2年目の前川さん、伊藤さん、3年目の門元さん



現在までに79人が研修を修了。そのうち23人は今も村に留まり、その多くがからむしの継承者としての仕事を担っている。

昭和村の「からむし」の歴史をひもとけば、14世紀後半、会津地方を支配した戦国大名・芦名盛政の時代にさかのぼり、戦国期の為政者にとって、からむしは貴重な財源であり、その栽培は大いに奨励されたという説がある。稲作に不適な高冷地の昭和村では、貴重な換金作物として積極的に栽培されるようになり、村人の生活に溶け込み、手から手へとその技が受け継がれた。江戸時代には、越後縮の原料生産地として名を高め、村で作られた原麻は新潟地方へ向けて八十里峠を越えた。しかし、第二次大戦後、化学繊維の普及などで、からむしは急速に日本から消えていった。昭和村が、村民によって伝承されていた技術の保存を目指し、からむしの生産・製造への取り組みを開始したのは昭和46年のことである。伝統の糸はここで結び直された。命脈を保った伝統技術は今、村の人々、そして織姫たちによってしっかりと保存・継承されている。

熟練の技が光る 「芋引き」と根気の「芋績み」

織姫交流館の向かいに建つ「からむし工芸博物館」には、からむしや麻の栽培に関する歴史や製法、工程がわかりやすく展示されている。「一時は24人に激減しましたが、現在は42人ほどの方がからむしを作っています」と説明してくれた平田尚子さんも6年前、織姫体験制度で、埼玉県から村にやってきた。昔から織物の世界に興味があったという。



▲からむし織を説明する平田尚子さん

大学4年のとき、母方の実家が喜多方にあって縁で知った昭和村のからむしの短期体験コースに参加した。自分のやりたいことはこれだと、卒業後、織姫に応募。体験終了後も研修生として残った。現在は、役場の臨時職員として博物館の業務を担当している。工芸博物館の入口に、地機じはたが置かれていた。平田さんに実演をお願いすると、「私は、まだまだ」と謙遜しつつ、酒井モト子さんを紹介してくれた。

酒井さんは、その栽培から織りまで一貫した技術を継承している。からむしを第二の人生の仕事と思いつめた。「始めたのは平成13年から。村の後継者育成事業に応募し、一から教えてもらいました。でも、家には機がありませんでしたから、機織りにはなじんでいませんね。昔、からむしは貴重な現金収入源で、母はからむしではなく、麻を織っていました。村でからむしを織るようになったのは、昭和50年代に入ってからです」酒井さんは足を器用に操作し、縦糸を交互に上下させ、軽快な音を立てて機を動かす。

「織るのは簡単。糸づくりの方が大変」と酒井さん。糸の品質を左右する「芋引き」には熟練した技が必要だという。刈り取ったからむしを清水に浸し、茎の表皮から繊維をこそげとる工程だが、熟練者のみが「きら」と呼ばれる光沢を作り出す。「きらがある」という言葉は、上質な原麻への賛辞となった。次が芋績み。作りたい糸の太さに合わせて繊維を裂き、毛羽立ったり、つなぎ目が太く



◀右上/「織り・生産技術」は福島県指定重要文化財になっている。
右下/原麻を繋いで出来あがった糸
左/からむし織の商品の数々

良質な「からむし」 を伝え続ける村

酒井さんの作業をフォローする平田さん。二人の間を、身内のよくなやさしい空気が包んでいる。平田さんからむしと村の魅力聞いた。「からむしのような伝統技術を教え



てくれるところはなかなかありません。貴重な体験をさせてもらっていると思います。村の暮らしは不慣れた面もあるけれど、人と人との触れ合いがあり、あったかい生活があります」

当初、村で自活することは大変だと案じたが、村の人々が野菜をくれたり、なにくれとなく面倒を見てくれ、不安は吹き飛んだ。

村に留まった織姫の中で、10人が村の男性と結婚した。村を離れた織姫も、収穫時期や栽培時期に手伝いに来る。彼女たちは「からむし」以上に、村の人々の温かさに魅せられたに違いない。平田さんと酒井さんの間に流れている空気が、それを物語っている。

博物館にあった一枚の展示パネルに心が動いた。昭和村大芦地区の、「からむしだけはなくすな」という先人の教えを守った家の話である。この家は、戦中戦後の食糧難の時代、周囲が雪崩をうって葉たばこ栽培に移行した時代、ひたすら良い根を守り続けた。

パネルは次のように記す。

「よいからむしというものは決して一朝一夕に作られるものではありません。良い根だけを残し、次の世代に引き継いでいく。根とともに、教えられた作業方法を伝え、次の世代へとつないでいく。その連綿とした伝承を行ってきた人、家があったからこそ、今も昭和村のからむしの美しさをみることができのです」

伝統とは、持続する奇跡にほかならない。昭和村には今日も古と同じ雪が降っている。

文／村上憲加 写真／小林恵

からむし織の工程



春に根の植え替えをし、5月下旬、からむし焼きを行う。畑を焼くことで、発芽を揃えて成長を均一にするだけでなく、害虫駆除の目的も果たす。



焼いたあとの畑に有機質の肥料をまき、藁を敷く。その後、からむしが倒れないよう萱で垣作り。畑の作業は多くの人たちの協力あってこそ。織姫たちも大活躍。



刈り取り 7月の土用頃から8月のお盆前までに2m近くに成長したからむしの刈り取り。



刈り取ったからむしは清水に浸し、皮を2枚になるよう1本ずつ丁寧にはぐ。



芋引き 道具を使って、表皮と繊維に引き分けるもっとも熟練を要する作業。体験生にも、その技が丁寧に指導される。



芋引きして採りだされた繊維は陰干しされ、束にして集荷される。栽培・芋引きの技術は平成3年に国選定保存技術に認定されている。



原麻集荷 集荷では、その品質が厳しく評価される。特上の糸は、越後上布・小千谷縮の原料として取引される。



芋積み作業 原麻を細かく裂き、太さが均一になるように原麻を組み合わせる先端をよりながらつなぐ。つないだ糸は「おぼけ」と呼ばれるわっぱの中に貯めておく。縦糸200匁、横糸100匁で着尺1反が仕上がる。

写真・資料提供／昭和村総務課企画係

安全で快適な国産畳表づくり い草の育成とゴザ織り

(熊本県八代市)

国産い草生産の大半を担う八代平野

日本人の生活空間の主役を担ってきた畳の和室。畳表のい草は日本の風土にマッチして、空気の浄化、保温、除湿等の機能を持つ優れたもの。しかし私たちが、い草がどのようなものか、植え付けや収穫加工、ゴザ織り、畳造り等については殆ど知らない。国産の畳表の安全性と特色、魅力づくりに取り組む現場の人々を取材した。

植え付けを終えた
い草の田



▲い草植えをする下永しおりさんと田づくりをする下永辰也さん(右)

江戸時代からの干拓事業によって生まれた熊本県の八代平野は、豊かな水量を誇る球磨川の灌漑用水と塩分を含む土壌が、い草栽培に適している。その風土を活かし、全国で生産されるい草の95%ほどは八代平野で栽培されている。

書院造りが広まった鎌倉時代から、畳は日本人の生活に欠かせない生活空間の主役であった。畳表のい草には、空気を浄化する機能や保温、断熱の役割もある。湿気が多い日本の暮らしでは、気付かないうちに畳が大切な役割を果しているのだ。しかし、近年では生活様式の変化によって、畳の需要が減っているだけでなく、国内で消費される畳表の8割が、安価な中国からの輸入であるというのだ。1505年(永正2)に、八代郡上土城の城



い草が栽培される八代平(龍峰山5合目より)

主岩崎主馬守忠久が、い草を植えて育てることを奨励したのが始まりと伝えられる八代平野のい草農家を訪ねた。

冬に苗植え、夏に刈取り

新八代駅に近い鹿兒島本線沿

いにある下永辰也さん(50)のい草田では、手植えによる苗植えが行われていた。12月ともなれば九州でも冷たい北風が吹く。

「手で苗を泥に差し込む時に、どうしても手前に隙間が空くので、北風で苗が倒れないよう、南側を向いて植えるたい」

「深植えしないよう気を付けてですね。深植えすれば株が張らんとですよ」



▶最近、多様ない草製品が開発され、畳表の材質も工夫されている(い業研究所展示室にて)

▶い草植えの手伝いに来た元い草農家の女性たち。冷えないようにしっかり着込んで



▼下永辰也さん

冷たい水田に何時間も足を浸ける作業だが、手伝いに来ている稲田幸則さん(62)は、裸足で作業をしていた。「田植え靴どん履きよったら、足を捕られて仕事にならんですもん」
 実は、稲田さんも以前は、い草を栽培していた。
 「後継者も居らんし、ゴザの値段もぱつとせんとし、経費も要るもんじゃけん」と、い草栽培は止めたそうだ。

北風の吹くなかで腰を屈め、



「植え終わったら、すぐゴザ打たっさんばんけん(畳表を織らなければならぬから)。一年中忙しかですたい。家族の手がなけりゃ出けんです」
 下永さんは、現在、熊本県い草生産部副部長を務めている。中国産の安い畳表が大量に輸入されている現状の中で、どのように八代の畳表を販売していくのか。頭を悩ませている一人だ。
 ここ数年で、心強い味方が現れた。
 「やっぱり国産は、お客さんに薦めんばということ、畳屋さんがお客さんを開拓して、国産が増えてきたこと言いよつたですよ」
 岐阜県、山形県、新潟県などの畳屋が、畳替えの少ない時期に数人で八代を訪れ、実際

植え付けは始まる。2本の刀をV字に組み合わせた大きな鋤をウインチで引っ張って、い草苗の根を切っていく。その苗を10本ほどに株分けし、約20cm間隔で植え付けていく。下永さんの田んぼ1町1反を全て植え終わるには、8人で約2週間が必要だ。
 下永さん宅では植え付けが終わると、すぐに織りが始まる。
 「植え終わったら、すぐゴザ打たっさんばんけん(畳表を織らなければならぬから)。一年中忙しかですたい。家族の手がなけりゃ出けんです」

下永さんのい草植えを手伝いに来ている小路永芳子さん(68)と園田美子さん(68)、園田栄子さん(65)も、同じ事情でい草栽培を止めた農家だ。
 夏の暑い盛りに植え付けた苗の根切りをすることから、い草苗の

泥染め、乾燥、選別

に苗植えを手伝ってくれたというのだ。「夏のい草刈りにも来よう」とあってですねと、言いよつたですもん」
 畳屋が、実際にい草植えを体験し、労働の大変さや生産者の品質に対する姿勢を知ること、国産畳表の良さを実感する。そうすれば、お客さんに薦めやすいというのだ。

い草の植え付けと畳表を織る作業は、ほぼ同時期に行われる。農家によって、織りを先にするか植え付けを先にするかである。
 笹原一好さん(53)さんの納屋を訪ねると、干し草のような、い草

独特の香りが漂ってきた。笹原さんは、苗植えを1月にポット式の機械で植えるため、手植えの農家が植え付けしている間に織りを先行している。
 「今、ゴザを打つとく、



◀泥染め、乾燥したい草(右)と、機械にかける前に一本一本品質や色を点検する笹原由美子さん

なら、製品が少ないから高かったい」

悠然と構えている笹原さんだが、「起きるとる間は、ゴザを打つとるけんな。どこもそぎゃんだろ。一時間10分で一枚の畳表。一日に12〜3枚かな。15〜16時間の労働になつど」と、由美子夫人(50)と二人で、それぞれの機械を担当して織り続けていた。

畳表の芯糸には、綿糸1本、それに綿糸と麻糸を各1本、麻糸2本を経糸にする3種類がある。麻糸2本を使った畳表が、立体感のある高級品となる。

6月下旬から7月中旬にかけて刈り取られたい草は、最初に天然染土で泥染めをする。この泥染めによって、乾燥が均一になり、織りの際に引っかかりがなくなり、畳表独特の香りが引き出される。

「い草の色を活かすならばひのみどり専用染土とフカ染土、それに3種類の普通(淡路)染土を混ぜて使った方が良かもんな。」

農家ごとに、泥染めに使う染土を工夫しているのだ。泥染めをした後、長さを選別して草の等級が決まる。長く、太さが均一のい草には、麻糸2本の経糸を使う。

「相手が中国産やで、負けんごつ厚う打つごつなつた。208cm以上の長さで、重さ3kg。最高のものを目指して仕事しよりますけんな」
機械に掛ける前に、い草の束を縦にして手に持ち、扇のように開きたい草一本一本の部分変色を点検する。高品質で高価格の畳表を生産するには、全行程で細心の注意を払わなければならないのだ。

品質向上と需要拡大をめざして い業研究所

全国で唯一、い草を研究する熊本県農業研究センターい業研究所を訪ねた。い草の品質改良と加工技術の開発、それにい草の遺伝資源の保存などを目的としている研究所だ。

我が国のい草生産のほとんどを担う熊本県だからこそ、その研究にも熱が入るといふものだ。改良した品種のいち押しは「ひのみどり」。茎が細く、きめの細かい畳表になるため、見栄えが良く高級感のある品種だ。部分変色茎が少ないため、手間が掛からず、捨てる率は従来品種が30〜40%だったのに比べ、1、2%に激減した。

統計で見ると、熊本県のい草生産農家は、ピークだった昭和50年の9758戸から、平成22年は679戸に減っている。作付面積はピーク時の13・4%にまで落ち込み、880haしかない。

ただ事ではない数字だ。全国の作付面積の約95%を誇る熊本県にして、この数字だということとは日本のい草産業界は、中国産畳表に押されっぱなしなのだろうか。

い業研究所の田中良典所長(59)は、高品質の熊本県産い草の可能性に期待を寄せている。「日本人は、精神的肉体的に、畳表の良さを知っています。杉の香りでリラックスし、血圧が下がるという成果が出ていますが、同じことをい草で出来ないのか。そんない草の効果を、数値として消費者に伝えたい」

需要を伸ばすためには、い草を畳表として使うだけでなく、いぐさ縄マットやい草座布



団、コースターや暖簾にも使ってもらおうと、商品開発にも積極的に取り組んでいる。

畳表を織っていた笹原一好さんが、手を休めて嬉しそうに話してくれた。

「昨年成人式を迎えた息子の^{だすけ}大獎が、今年3月には農業大学校を卒業して帰ってきます。百姓を継がすつとが、良かかどうかと思うばつてん」

熊本県のい草生産農家の96・5%が、水稻とい草を輪作する専業農家である。

冷たい北風の中で苗を植え付け、酷暑の真夏に刈り取るい草。泥染めの土埃が舞うなかでの織り作業。そんな厳しい労働の中で培われた熊本い草の品質に対する生産者の自信は、八代平野に500年前から続く伝統の技術に支えられているのだ。



▶畳表織り機を操作する笹原一好さん
▲い業研究所研究員の皆さん。後列左が田中良典所長

●熊本県い業生産販売振興協会
☎0965-35-3899
●八代市農林水産部 農業振興課
☎0965-33-4117

加工して(独)国立印刷局四国みつ
また調達所に納品されたミツマタ



草木と根比べ
③

山間部を利用してミツマタを栽培・加工し、紙幣用に独立行政法人国立印刷局に供給してきた池田地区だが、栽培農家の高齢化で休耕地が目立つようになった。その対応策として取り組み始めたのが建設業界。土木関係の公共事業の減少と不況の影響で仕事が大幅に減少してきた。保有する人材と機材、ノウハウを活かして「三好お札の里」再生に向けて活動をはじめた。市とJA(独)国立印刷局四国みつまた調達所も協力、同調達所の技術者がミツマタの栽培や加工方法の指導に当たっている。

減り続けているミツマタの産地

古くから和紙の原料は楮、三桧、雁皮の内皮が使われてきた。ミツマタは日本固有の製紙原料で200年程前から各地で栽培され、繊維が長くて強靱で光沢があることから高級和紙に加工されてきた。しかし産地は過疎化と高齢化で、生産量は年々減少、現在生産量は岡山県がトップで、他には高知県、島根県、徳島県、愛媛県が主な生産地になっている。

ミツマタは半陰性植物で、水はけのよい斜面に適していることから、徳島県内では旧池田町

建設業界が協力、ミツマタの栽培・加工 三好お札の里

(徳島県三好市池田町)

の山間部で古くから栽培されてきた。加工された和紙は「阿波和紙」とも言われ、繊維が柔軟で細く、光沢があることから印刷適性に優れており、世界一の紙幣の品質を誇る(独)国立印刷局が購入、「お札の里」として地域の発展を担ってきた。しかし近年は離農や農家の高齢化で休耕地が目立つようになっていた。

そんな「お札の里」を何とかしたいと平成21年5月に発足したのが「三好お札の里協議会」。公共建設事業の減少で人材や機器が余っている建設業界の人にミツマタの栽培と加工を担ってもらおうというもので、同協議会には協同組合三好郡建設業協会(井上孝雄理事長)と4社の建設会社が参加し事業をおこなっている。三好市長やJA組合長、(独)国立印刷局四国みつまた調達所も協議会メンバーで、栽培・加工には同調達所の技術者が指導・協力している。

協力しあって地域を発展させたい

三好市は平成18年に三野町、池田町、山城町、井川町、西祖谷山村、東祖谷山村が合併して誕生、吉野川の景観を活かした大步危峡黒川湿原、剣山等の景勝地で知られるまち。

旧池田町にある三好市産業観光部農林振興課の齊藤稔課長補佐の案内で、「三好お札の里」の加工所へ出かけた。吉野川の上流に当

たり、川沿いは最適なドライブコース。やがて道路と民家、裏手の斜面に畑が耕作されている池田町漆川に到着した。以前はタバコが栽培されていたというが、休耕地が増えたため最近では猿や鹿等が出没しているようだ。

加工所は市の水道タンクが設置されていた場所、ミツマタ加工作業用に応じたスペースを整備、屋根を張り、建設業者たちのノウハウを活かして加工用の機械を設置している。

通常は12月から1月頃の寒い時期に原木を採取して加工作業をするのだが、我々のために会代表の(株)池北代表取締役会長の池北忠義



◀上/池田町に設置された「三好お札の里」施設
下左/採取した原木を蒸熱するスチームボックスを説明する大黒さん
下右/ミツマタを剥皮する機器を操作しているところ

さんと三縄建設(株)代表取締役大黒和彦さんが来てくださった。

11月下旬から翌年4月頃までの寒い時期に、高さ130cm、幹径20cm以上に達したミツマタの枝を採取する。これを大型の箱に並べて蒸熟し、やわらかくなった原木の皮を剥いていく。皮は乾燥すると黒皮が現れてくる。一晚水漬けし、清流などで洗って黒皮や甘皮をしっかりと取り除くと白皮になる。この作業を「しげ皮」「さらし皮」と言い、機械化が難しいため手作業で行われている。

「三好お札の里」では、蒸熟用に鉄板で出来た大型スチームハウスを設置。天井から熱い蒸気で蒸して柔らかくした原木は、その隣に設置した剥皮機で表皮を剥いていく。大黒さんが持参してきた枝を入れると、チェーンが回転しながらたちまちきれいに皮が剥けた。「皮を剥いた枝は、華道家の假屋崎省吾さんが使って人気となり、銀で塗ったりして生け花に利用されていますよ」と大黒さんは言う。「白皮にしたあと日陰干ししますが、かびが生えないようにと神経を使います」

昨年は試験的に19本の原木を加工した。今後は毎年100本は加工する計画だという。「一本100円にはなる。高くはないけれど確実に印刷局が購入してくれます。ミツマタの栽培地を増やして効率よく作業していきたいと思います」と池北さんは言う。

苗木を育成し耕地拡大へ

ミツマタを栽培している畑の一つに案内してもらった。人家も多い場所で、畑は平地だが周りに森があるため、日照時間がやや少な

く、半陰性を好むミツマタの栽培に適している場所だという。地面にはしっかりと粉殻を敷き水はけにも気を使っている。植樹して2年経ったミツマタは株をたくましく伸ばし青々とした葉を広げている。今年の冬には太い枝を2本ずつ取り、加工する予定だという。

そこからしばらく行った場所に、池北さんの自宅と広い農園があった。昔から野菜作りや園芸を趣味にしてきた池北さんは、いまミツマタの苗木栽培に力を入れている。

植えて4、5年たった生育のよいミツマタから7月頃に種を取って砂と混ぜて貯蔵し、翌年4～5月頃に種まきをする。直射日光をさけて布で覆いながら発芽させ、苗は何度か間引きや施肥して1年育て、さらに仮植えしたあと畑に本式に植樹するのだという。株分けやさし木で増やす方法もあるが、今後広い場所にミツマタ畑を確保していくためには、実生法で苗木を沢山確保していくことが必要で、工事現場の第一線を降り植栽を楽しむ池北さんにとつては新たな生きがいにもなっているようだ。「気を使うのは、イノシシが苗床のミミズを食べに来て畑を掘り起こしてしまうことだね。成長したミツマタは猿も鹿も食用しないのだけ」と笑う。

池田町の中心部、小さい川の先に(独)国立印刷局四国みつまた調達所があった。広い庭の奥に倉庫棟があり、四国各地から届いたミツマタが収納されている。白く乾燥した美しい繊維である。やがて製紙され、紙幣になる。

ご存じのように、日本の紙幣は透かし、深凹版印刷、特殊発光インキ等の偽造防止の技術を駆使した世界一の品質を誇っている。当



▶ミツマタ畑で池北さん(左)と大黒さん
 ▼2年育成したミツマタはしっかりと枝を伸ばしている ◀(独)国立印刷局四国みつまた調達所の建物(上)と倉庫に収納されている加工したミツマタ



然ながらそのための用紙も、複雑な印刷に耐え、手にさわっただけで判り、何度でも使える強度が求められ、(独)国立印刷局が認可した産地のもので、厳しい加工条件もクリアする必要がある。「しかし産地は高齢化等で年々生産が減少しており、我々も出来る限り指導・協力していきたいと思っています」と岡本匡史専門官は語っていた。

文/横田塔美 写真/小林恵





縮れ穂先を生かして編み上げる 南部箒ほうき (岩手県九戸村 有)高倉工芸



伊勢丹デパートで南部箒の実演販売をする高倉清勝さん

穂先に縮れのあるほうき草を自家栽培し、一本一本を厳選して密度濃く丹念に編み上げた(有)高倉工芸の南部箒。かつては南部地方の多くの農家が自家用に製造してきたが、現在ではほぼ皆無に。この伝統技術を継承し産業として興そうと決意した高倉徳三郎氏は、研究を重ねて穂先に強い縮れのあるほうき草を栽培、穂の具合や編み方により60種に及び和洋箒を製造する。自然素材を熟練した手技で美しく仕上げた芸術性に加え、30年使っても変形一つしない機能性も誇る。

縮れた穂先の特徴

ほうき草はほうきモロコシとも言われる植物で、(有)高倉工芸では品質改良しながら優良種を育成してきた。春の雪解けを待つて畑に種播きし、真夏に2〜3mに伸び、穂に実がついて結実する頃に収穫する。岩手県の北部、九戸地方は「南部」と言われ、初夏から夏の頃しばしば太平洋から冷たい風「やませ」が吹き込むため、昔から米に代わる作物として

アワやモロコシ等の雑穀が栽培されてきた。ほうき草もそのような植物の一つで、縮れは「やませ」によりつくられた自然の恵みでもある。南部地方の一部の農家では農閑期に自家用の箒を作り、市へも出して農家の副収入になつてきたが、掃除機の普及で栽培製造する農家は殆どなくなった。

代々この地で手広く農業をやつてきた高倉家だが、高倉徳三郎さん(77)は「この伝統ある特産品を誰かが継承していかないと栽培技術も製造技術も消えてしまう」と危惧し、30年前に農産物に代わつてほうき草の栽培を本格的に始めた。

「栽培には、種採り、土造り、収穫と人手もかかるので製造状況を見ながら5反歩ほど減らし、いまは2.5haを栽培しています。真夏、実がついた穂が頭を垂れる頃刈り取るのですが、タイミングが難しい。早すぎると縮れが完成しない、遅すぎると茎が硬くなり折れやすくなります」

ほうき草は赤い小さい実を沢山つけるが、実が赤くなる前に刈り取る。実を生かしたままの箒もあるが、大半は実を取り除いて縮れ部分をほうきにする。縮れ具合が良く長さのあるものほど価値がある。

収穫したほうき草は折れないように注意しながら大きな窯で湯通

▼八月、刈り取りを間近に迎えたほうき草(ほうきモロコシ)。穂先に独特の縮れがある



◀乾燥室や収納庫、作業場が並ぶ高倉工芸の建物

しして締め、天日干しする。さらに室内の乾燥庫で風にさらして干した後、分類して保管、熟練の編手たちが一本一本等に仕上げていく。

見て触れて判る優れモノ

ほうき草の栽培、収穫、湯通し、乾燥作業という一連の力仕事を終えると秋。父徳三郎さんに代わって経営を担うことになった代表取締役の高倉清勝さん(45)は、箒の製造は父徳三郎さんと社員たちにまかせて、年末まで各地のデパートへ南部箒のPRのため実演販

売に出かける。

そんな清勝さんを訪ねて、伊勢丹デパート府中店へ出かけた。高級食器類が並ぶ五階の中央部に南部箒のコーナーが設けられ、高倉さんが実演していた。

「えっ、この箒百万円している」と主婦たちが歓声をあげている箒は長さ130cm、幅30cm、重さ約780gある長柄箒で、18金や一部プラチナも使って編み上げ、桐箱に入っている。50〜60cmもある縮れた穂先をぎっしり濃密に束ねて繊細に編み上げたもので、この

ような縮れ部分の多いものは少ないため、10数年かけてストックするのだという。

清勝さんはきちんと正座しながら束ねた茎を一本ずつ折っては手早く絹糸で編んでいく。小箒でも数十本のほうき草が使われており、それを束ねて編み上げるには大変な力と技術が必要だ。清勝さんは父親からその技を学ぶと共に、ほうき草という自然素材の育成栽培・加工に科学的、近代的手法を取り入れる努力を重ね、岩手大学認定のアグリ管理士の資格を持っている。

感心して見守る女性客たちに、編む手を休めて「この縮れが特徴で、掃除機では取れにくい絨毯やセーター等に着いたゴミや糸くずをさつと掻きだします」と楽しんで説明する。

アンゴラの生地に着いていたゴミは南部箒のはけを軽く当て

◀身近に置いて衣類のほこりやゴミをさつと取り除く和洋小箒(5000円〜)



▲刈り取り湯通し、天日干したほうき草は、乾燥室でじっくり干す。写真は種用のほうき草



▲乾燥を終えたほうき草は茎の長さや穂の縮れに応じて分類していく



▲収納庫に納められたほうき草



▲製作する箒に合わせて束ねていく



▲和洋箒を製作する欠端さん。足で支えながら糸を巻き編み込んでいく
▶模様編みのあと更にタコ糸で茎を締める



▲穂先の縮れが南部箒の命





南部箒の伝承と工芸的技術の向上に邁進してきた高倉徳三郎さん

「このような品物は、直接見て手に触れて貰うことが一番です。不景気でそうは売れませんが、買った方はとても喜んで愛用してくれています」と清勝さんは言う。

地域の女性たちが伝承に貢献

北上山地の北端に位置する九戸村戸田地区へ(有)高倉工芸を尋ねた。
広い敷地の中に、住まい、乾燥棟、収納庫、作業場等が建ち並んでいる。しつかり乾燥したあとのほうき草は茎が白色に美しく変身し、針金のように縮れた穂先を持つている。これらを二人の女性が穂と茎の状況に分類して収納庫に納めていた。

作業場のドアを開けると、製作を待つほうき草が立ち並び、風と干し草の心地よい匂いが流れ出てきた。出迎えてくれたのはこの道60年の高倉徳三郎さん。一昨年奥様を失った

が、毎日車を飛ばして平庭高原のふるさと館へ入浴に行き郷土食「まめぶ」を食して、という澁刺たる現役である。職工さんを育て、共に作業することが若さの秘訣と思われる。

手前の部屋では3人の女性がほうき草の縮れ具合と縮れ長さに合わせて揃える作業を行っている。一つの箒に30〜50本の茎が使われており、茎の太さも選別の大切な要因とか。それを箒の形に応じて茎を湿らせながら折り曲げ、絹タコ糸で美しく幾重にも縛り上げていくのがベテラン徳三郎さんの仕事。「細い茎の中に太いのが一本でも入ると、細いのが負けて美しく編めない。ここの基本をしつかりやらないと後の作業に影響します」

次の部屋では原型が出来あがった箒に編み込み模様を入れる作業が行われていた。小型の和洋箒に編み込みをしているのは欠端サトさん(68)。ほうき台には4種の絹糸が設置され、折り曲げた茎と糸を織物のように編み上げていく。熟練の技に加えて力量も必要で、足と手を使いながら糸をきつく巻きこんでいく。「この編み込みができる人は数人しかおらず、欠端さんは勘がよく覚えが早かったね」と徳三郎さんが褒める。はじめは畑の草取り、次は収穫と乾燥の仕事を経て、編み職人として5年目、手間がかかる作業なので1日に20本つくるのがやっとだという。

働く女性たちは殆どが地域のお母さん達。南部箒のことは知っていたが、本格的な箒製作はここで習得し、年間を通して働いている。30年使用したという古い箒があった。取っ手のところに使った人の手の跡が少し残っているが、形も色艶も穂先の縮れ具合も新品と



草の心地よい香りがする出来たての箒たち

殆ど変らない。「親から子へ孫へと何十年でも使える生活用具です。だから決して高くないと思いますよ」と徳三郎さん。多くの人に使ってもらいながら改良・工夫を重ねて、現在の形と種類を完成したと言う。

穂先の縮れが60cm以上ある長箒用のほうき草は、一年に一、二本しか収穫できない貴重なもの。百万円、50万円する箒は、檀家の人がお寺へ寄贈したり、茶道、華道関係者から愛用されているという。

収納庫には出来あがった箒が沢山並んでいる。実をつけた長柄外箒は芝生の落葉取り等に適している盆栽用箒で、天井掃除用、便器用等の箒もある。小箒はセーター等の仕上げに最適とクリーニング店からの注文も多いという。すべての箒に施された美しい編み込みは、身近に置いて長年愛用してほしいという作り手の心が織り込まれているのである。

「私の夢は一千万円ほどする究極の逸品を完成することで、最高の素材を少しづつストックしているんです」と徳三郎さんは楽しそうに語っていた。 文/浅井登美子 写真/小林恵

夢と暮らしを紡ぐ
①

雪深い山里／秋山郷の暮らしが育む 猫つぐら（長野県栄村）

◀藁で猫つぐらを編む
高橋甚治さん

信州の最北端に位置する栄村は、秘境秋山郷で知られる全国屈指の豪雪地帯。雪に閉ざされた長い冬の暮らしの中で、人々は自然の恵みをいただいて生活用具の殆どを自分たちで作ってきた。それらの多くが貴重な伝統工芸品に認定され、伝承されている。寒い冬を人も猫も暖かく暮らすために編まれた藁製品「猫つぐら」を中心に取材した。



▲初冬を迎えた栄村青倉集落

●交通便の良い観光村に

栄村は長野県最北端に位置し、北部は千曲川が東西に、志久見川、中津川が南北に流れ、その沿岸の平坦部に集落を形成している。南部は苗場山、鳥甲山等2000m級の山が連なり、その麓に12の集落が点在している。秋山郷はこれらの山間部の総称で、豊かな自然とふるさとの原風景、数々の温泉等があることから、秘境の観光地として賑わっている。

その入口に当たるのが栄村北信地区。今では上越新幹線越後湯沢駅からクルマで1時間という便利さで、村の野菜や山菜、伝統食品等を売る「道の駅」に到着した。

間もなく冬を迎える道の駅では、棚田米、栃餅、手打ちそば等が並び、午前中から客で賑わっている。

千曲川の段丘は広大な畑作地帯だが、現在は「さかえ倶楽部スキー場」、「トマトの国」、「絵手紙タイムカプセル館」、「山路智恵絵手紙美術館」が開設し、連日観光客が訪れている。猫つぐら取材の手配をお願いしていた(財)栄村振興公社事務局は、道の駅から数分の場所にあり、JR飯山線森宮野原駅を兼ねた交流館になっている。電車の到着時間に合わせて職員が切符を売り改札口を開けていた。駅構内には昭和20年2月に積雪日本一、7m85cmになった時を記録した標柱が立っているという。館内は観光客の休憩所になっており、村の観光物産や資料を揃え、喫茶店もあるお洒落な造り。担当の山田久美子さんが、二階に

森宮野原駅に併設される交流館。観光物産を揃え、喫茶店もある
右下／出来たての猫つぐら



▲森宮野原駅に併設される交流館。観光物産を揃え、喫茶店もある
右下／出来たての猫つぐら



▶高橋夫妻と山田久美子さん(右)



▲広い雪よけ玄関が藁の保存や整備に便利

●長い冬は藁を使って手仕事

は人気が出て、購入希望者には予約をお願いすることもあるんです」と山田さんは言う。

早速、取材をお願いしている高橋甚治さんの家へ案内してもらった。民家が立ち並ぶ青倉集落にあり、日当りの良い家。玄関には雪払用の土間があり、その奥にもう一つの玄関口がある。土間には猫つぐら用の藁が積まれて



▲天日干しした藁を庭先で整えて干す



▲土間の石の上で藁をしっかりと叩く

出来たての「猫つぐら」が数個保管してあるというので見せてもらった。

長年製作しているベテランの男性が、穫れたての新米藁で編んだもので、網目が均等で美しく、形も優雅、藁の匂いもいい。「最近

いる。

にここにこと出迎えてくれた高橋さんは86歳、奥さんのふさはさんは87歳で、二人暮らし。

「もう歳だから止めようと思っていたんだが、山田さんがまだ頑張つてと引き止めるもんだから」と高橋さんが言う、「そうよ、高橋さんの作った猫つぐらは丁寧で、とても人気があるんだから、ぼちぼち続けて」と山田さん。ふさはさんも「何かしていた方が体にもいいからね」と相づちを打つ。

高橋さんは7反歩の稲作をする農家だったが、60歳の頃から猫つぐら作りを始めた。10年ほど前から稲作は親戚の家に依頼し、猫つぐら作りに専念している。

「二年中作つてやつと30個、今は10個作ればいいところです。若いうちは一個作るのに3日だったけど、いまは10日かかる。でも振興公社の山田さんに励まされて買ってくれるので、止める訳にはいかん」と高橋さんはつぶやく。



▲仕事の手を休めて奥さんと楽しいお茶タイム

編むためには良い藁を確保することが必要で、コンバインをやめてバインダーで丁寧に刈ってもらい、ハザにかけて天日干しする。藁は家に取り入れた後、茎以外の部分を取除いてよく叩いてしなやかにする。玄関の土間には使い込んだ藁打ち用の石が仕込んであった。

藁は猫つぐら以外にも、筵、かんじき、蓑、草履等に使う大切な素材だった。つぐらは猫用以前にも、食品や穀物を入れる飯つぐらや幼児を入れるつぐらとして作られてきたが、今はつぐらを利用する家も減り、また稲刈りも機械化したため、良質の藁の確保が難しくなっている。さらに、今年は猛暑で藁の出来がいま一つ優れない上に、止めるつもりだったので確保した量が足りなさそうだと嘆く。「猫つぐら製作では関川に名人がいたので皆で講習を受けに行き、多い時は最大60人が作っていました。猫も沢山いたしね。今は農閑期に作る人が20人程いるが、他所から見習い

▶高橋さんが作った猫つぐら、飯つぐら、へちま型をした物入れ





◀ 栄村国際絵手紙タイムカプセル館と展示会場。絵手紙用の画材や出版物も多数売られ、習作を楽しむグループも



たいと言つて来る人が増えている」

高橋さんのところにも先日、上田市の美大出身の女性が3日間通つてきた。「編むことに興味があると云つていたね。最近絵手紙館を訪ねてくるグループも多くなり、賑やかですよ」とふささん。暖かい炬燵で美味しい漬物を出してくれた。

例年積雪は3m程だが、平成18年は5〜6mの豪雪となり、一階は3日間雪で真っ暗だったというが、「停電も水の凍結もない。子供は娘が5人、孫も大勢いて、近くに住む娘

が良く来てくれるので何の心配もありません」とこやかだ。

猫つぐらは底から編みはじめ。針に2本ずつ藁を入れて刺して、しっかりと束ねて、それを繰り返していく手間のかかる作業である。直径40cm程の底が出来あがると、立ち上げて丸みを持たせながら出入口を作り、目を減らしながら屋根部分を編んでいく。一目が10本以上の藁で編まれているので頑丈で、ずっしり重い。

実は私も10年程前に3個を購入して今も猫たちが愛用しているが、爪を研ごうが上に乗って遊ぶのがビクともせず、しっかりと原型を保っている。購入した猫つぐらは主婦たちが製作したもので、網目に素人っぽさがあつたが、中に小さな小豆が入つていて「猫と楽しく大切に使うてほしい」という手書きの紙が添えてあり、大変感動したものである。

村の女性たちの猫つぐら作りは、野沢菜漬けが終わった12月頃から始まるようだ。

● 絵手紙の展示・交流の拠点として

集落を見下す高原地帯には自然景観を利用して「栄村国際絵手紙タイムカプセル館」と「山路智恵絵手紙美術館」があり、見学者のバスが何台も停まっている。長野オリンピックを機に始まった絵手紙活動で、村と絵手紙協会の2000年に「21世紀への絵手紙展——20世紀を忘れないよ」と公募したところ63万通の絵手紙が全国から寄せられた。2007年にタイムカプセル館を完成し、現在100万通を超える絵手紙を永久保管、数々の展示会や製作講座等を行っている。近くには、小学生の頃から毎日絵手紙を書いて

小池邦夫（絵手紙の創始者）へ送ったことから話題になり、その作品が世界的にも注目される山路智恵（東京生まれ・30歳の美術館もある。スキー場施設の一部を転用したもので、畳4畳分の大作まで約150点が展示され、見学者たちをうならせている。

運営は絵手紙（株）に委託しているが、秋山郷を訪ねる人も増えて、栄村を元気にしている。

秋山郷は初冬を迎えて、訪れる観光客の姿は少なかったが、木々を渡る風の音、ヤマガラやヒガラ等の野鳥のさえずり、川の音などの壮大なシンフォニー会場で、山溪の素晴らしさに改めて感動した。「のよさ

の里」や最奥にある「切明温泉」では赤々とストーブが燃え、天然温泉はたつぷり湯をたたえて、訪れる人を待っている。真冬も除雪車がくまなく走るので施設は営業、雄大な雪景色と村民の冬の暮らしを見たいと出かけてくる若者が多いとのことである。

文／浅井登美子 写真／満田美樹



秋山郷小赤沢にある秋山木工生産組合が運営する売店。手彫木鉢、山ブドウや鶯等で編んだバッグ、自然木花台等、秋山郷ならではの民芸品が多数ある ☎0257-67-2210



●財団法人栄村振興公社 ☎0269-87-3115
●絵手紙タイムカプセル館 ☎0269-87-1920

夢と暮らしを紡ぐ②

民族の誇りをもって アイヌ文化を未来へ伝える

(北海道平取町二風谷)

●女仕事に織りなす織物の世界

近代以降、明治政府の同化政策により、北海道の先住民族であるアイヌの文化や風習は衰退を余儀なくされた。その中にも、アイヌプ

リ(アイヌの風習・伝統)の火を絶やさず受け継いできた土地があった。アイヌに生活文化を教えたとされる神・オキクルミが降臨したとされる沙留川流域にあり、アイヌの伝統が色濃く

残る北海道平取町二風谷地区である。この地で、アイヌ民族としての誇りを持ち、文化の継承と再生に力を注いでいる人々を訪ねた。

北海道の玄関口・新千歳空港から車で1時間余。平取町二風谷は、自然豊かな沙留川流域にある。古くからのアイヌ文化を色濃く留めた土地だという。

平取町内に入り、左に沙留川の気配を感じながら国道をしばらく走ると、マンションのような建物が見えてくる。それが二風谷ダムだと理解するまで少し時間がかかった。ダムを過ぎると、そこが二風谷の中心部である。



▲松坂木綿に刺繍を施した着物を手にする藤谷のみ子さん



▲柔らかく煮て乾燥した木の皮を細かく裂いて一本の糸に仕上げる



▲丁寧に巻きあげた糸玉。縦・横糸で2個の糸玉を使う



▲夫・憲幸さんのために作った着物。開口部等に魔除けの文様が施されている
▶織物は腰と支柱でしっかりと固定する



国道を右に入ると「萱野茂二風谷アイヌ資料館」がある。敷地内にアイヌのチセ(家)が数棟建っている。そのうちの棟が、アットウシ織を継承している藤谷のみ子さんの仕事場。「寒いから火を炊いたの。ちよつと煙いけど我慢してね」と元氣な声で迎えてくれた。昭和58年から木彫り職人の夫・憲幸さんとともにチセを仕事場に、今年で29年目を迎えるが、憲幸さんは4年前に亡くなり、今はのみ子さん一人で仕事場を守りながら、職業訓練指導員として地元の人たちに指導もしている。アットウシ織は、オヒョウやシナなどの樹



▶ 萱野茂さんに勧められて仕事場に建てられたアイヌの伝統的家屋ポロチセ(大きい家)



皮を採取し、その繊維を糸にして織り上げる織物。アイヌを代表する衣服であり、時には晴れ着として愛用され、アイヌの女性たちは、自らの手で織り、刺繍を施した衣服を夫や子供たちに着せることが最高の誇りだった。

藤谷さんは、母親の織る姿を見て育った。

「私も織りたくて、母が機からちよつと離れた間に、いたずらで織ったりすると、母は『ダメ』と言いつつ、苦笑いしていましたね」

母親が病気で入院したとき、中学3年生だった藤谷さんは母が押入れにしまっていた織りかけの機を引っ張り出して、一反の織物を仕上げた。「その反物がすぐに売れたの。もう、うれしくて」。バッグや財布に加工するシナの反物が貴重な現金収入になった時代である。以来、本格的に織物に取り組みようになった。

アットゥシ織は、1本の長い糸を伸ばしながら、必要な幅に縦糸の本数を並べ、一方を柱などに固定し、もう一方を織り手の腰のバンドで固定する形で織る。織物の原点ともいえるやり方である。縦糸を上下に分けるのは

足ではなく、下糸を1本1本丁寧に棒に結び手で持ち上げて縦糸を上下させる。小ぶりの機だから、一定の空間があればどこでも作業ができ、持ち運びも可能だ。

織り以上に根気のいる作業が、樹皮の採取から始める糸づくりである。樹皮を木灰などで煮て柔らかくし、2〜3mmの薄さにはいだ繊維を、一本の長い糸にしていく。「一本の糸から着物に仕立て、刺繍をして仕上げるまでには何カ月もかかるし、大変な仕事です。でもね、愛する家族のためですから、とても幸せな仕事」と話す藤谷さん。

そんな藤谷さんのアットゥシ織と着物の製作方法を保存しようと、平成11年、勲アイヌ文化振興・研究推進機構が「アイヌ生活文化再現マニュアル作成事業」の一環として映像化・文字化に取り組んだ。「夫婦ともに木彫やアットゥシ織を続けてこれたのも、萱野茂さんのおかげ。長い間、アイヌ文化の保存と継承に尽力された方です」と藤谷さんの口から、一人の人物の名前が飛び出した。

憲幸さんの作品の数々。その緻密さは芸術的域に達している



● **アイヌの伝統文化の継承・再生の歴史**

萱野茂氏。大正15年、二風谷に生まれ、平成18年に79歳で亡くなるまで、アイヌ文化や風習、アイヌ語の保存・継承のため、精力的な活動を続けた人物である。



幼い頃、アイヌ語を母語とする祖母が語る昔話を聞きながら育った。アイヌの思想文化は、呼吸をするように氏の体に染み渡った。アイヌの生活から離れた時期もあったが、アイヌの生活文化が消滅するのを恐れ、アイヌの生活民具や衣服の収集を始め、昭和47年の「二風谷アイヌ文化資料館」開設に尽力した。

その後、同館は町に移管されたが、平成4年に「平取町立二風谷アイヌ文化博物館」が新築されたため、旧建物を町から買い取り、「萱野茂「二風谷アイヌ資料館」と名を改め、再出発した。両館に保存・展示されている萱野氏の収集品のうち1121点は、平成14年「北海道二風谷及び周辺地域のアイヌ生活用具コレクション」として、国重要有形民俗文化財に指定された。



萱野茂二風谷アイヌ資料館と萱野茂氏。収集した資料はすべて出所が明らかで、貴重な研究資料に

平成6年には、アイヌ民族初の国会議員となり、国会で史上初のアイヌ語で挨拶を行った。アイヌが日本の先住民族であること、アイヌ文化の保護を目的としたアイヌ文化振興法(国)成立を訴える。

一方、二風谷ダム建設に徹底して反対を唱え、用地の強制収用取り消しを求めて提訴。平成9年、判決は、提訴は棄却されたが、ダム建設は違法、アイヌ民族を先住民族と認めるといふものであった。アイヌ文化振興法が成立したのは同年のことである。

アイヌの文化保護を訴え、走り続けた萱野氏の思想と行動力は、現在、館長として資料館を運営するご子息の志朗さんと奥さまの知子さんにしっかりと受け継がれている。

そんな萱野氏のアイヌへの愛情の結晶ともいべき資料館と文化博物館の展示品をゆつくりと見せていただいた。精密な刺繍や彫りが日常生活用具に施されている。すべて手仕事で仕上げられた品々。物言わぬ品々が、それらを手塩にかけた人々の息づかいと手のぬくもりを語りかけてくる。

●生活民具や資料的作品から芸術作品へ

翌朝、木彫の工房に足を運んだ。「北の工房つとむ」の貝澤徹さん、「つとむ民芸店」の貝澤幸司さん兄弟を訪ねる。お二人ともアイヌの伝統の木彫を伝えつつ、それぞれが得意な素材で木彫の仕事に取り組んでいる。

弟の幸司さんは釣り好きが高じて、魚を数多く彫っている。「魚のことは、すべて頭に入っているから、自然に手が動きます」と幸

司さん。しかし、それは、父親の仕事を手伝いながら、女性の顔をひたすら彫った修業時代の賜物。「ずいぶん手を切りましたけれど、のみの使い方や彫り方を習得できたと思っっています」。マキリ(小刀)を使って伝統的工芸も手掛けながら、絵の世界にも活動を広げ、動物に伝統文様を描くデザイン画を創り出した。

動物を素材に木彫に取り組んでいる兄・徹さんが、アイヌの伝統的木彫へ傾倒したのは30代に入ってから。きっかけは、建設されたばかりの文化博物館で開催されたシンポジウムで発言者となったことだった。徹さんは、押入れにしまっていた曾祖父の作品を紹介した。そのとき、木彫の先輩たちの目の色がサツと変わったことに驚いたという。

作品は、明治25年頃に作られた「イタ(盆)」。曾祖父・ウトレントクは有名な木彫家で、その作品は当時の宮内省にも買い上げられた。曾祖父の作品に伝統の美しさと強さを見て取った徹さんは、その複製を彫ることからアイヌの伝統の世界に入っていく。

6年前には「イタ」を發展させ、木の風合いを生かしながら布を表現する「樹布」と名づけた作品を世に出した。「アイヌの木彫は、資料的に展示されることが多いけれど、芸術作品として美術館で展示される方向も必要ではないか」と徹さん。その面差しが、仕事場

▼北の工房「つとむ」 右/貝澤徹さんと桌の木彫作品 左/貝澤幸司さんと作品。魚の木彫以外にもユーモラスなアートのなものも多い



に飾ってある曾祖父の写真に重なる見えた。一方、夫婦で東京から移住したのが、「高野民芸」の高野繁廣さん。「一人旅の途中、一文無しになったところが二風谷だった」と高野さん。昭和40年代後半、アイヌの生活が色濃く残る土地に大きな衝撃を受け、ここに住もうと思ったという。木彫家・貝澤守幸さんに5年の年季奉公で弟子入りしたものの、具体的な指導はなかった。師匠の仕事を盗んで覚えうかとも思ったが、お礼奉公で2年はいようと決心、「それが今まで続いちゃいました」と

▶東京から移り住んで40年の高野繁廣さん



笑う。その間、師匠の娘さんに、亡き父に代わり、木彫を伝授するまでになった。店内には、アイヌの伝統的文様の木彫作品が置かれている。師匠の技術が受け継がれていると話す。「まだまだ一人前なんかじゃない。修業中です」と即答が返ってきた。

●未来につなぐー 無限大の文様デザイン

平取町アイヌ文化情報センター内の二風谷工芸館には、地元工芸家による木彫や織物・刺繍などの作品が展示販売されている。ここに、かつての北海道の観光ブームで量産された木彫の熊の世界はない。「アイヌの木彫を一言では語れません。作風もさまざまで、皆木彫に対して深い思いをもっています」と話すのは、地元工芸家の関根真紀さん。高野さんが木彫を指導した娘さんで、女性としては珍しく木彫の技も継承している。

アイヌの木彫や刺繍には、独特の文様が施されている。うずまき、とげの形、ひし形な

どの基本形を組み合わせて作る文様には、地域ごとに特徴があり、その意味もさまざまという。「無限大につながるようにデザインするのがアイヌの文様。基本形を組み合わせたものが、途切れない文様を作るのは難しいけれど、小さな文様が無限大に広がる宇宙につながると思うと、すてきでしょ」と関根さん。

そんな関根さんは、自身を「現代のアイヌ」と称する。「現代だから、合理的に考え、便利なものを利用します。でも、先祖が継承してきた形はきちんと受け止め、理解・消化した上で、次代に引き継ぐことが大切」

どんな文化でも、時代によって変化するのは。アイヌの社会でも、男女の仕事の棲み分けにこだわる時代ではないと言う。「でも、伝統的な儀式などでは、受け継がれてきた性差のルールを大切にしたいですね。アイヌの伝統の中で培われた節度を感じさせる言葉である。

仕事の手伝いをしてくれるようになった11歳の娘さんにも、アイヌの手仕事を教えていきたいという関根さん。

現在、町の小学校では、総合学

習の時間や夏休みの体験学習を通し、木彫や織物・糸作りなどアイヌの伝統文化を学んでいる。独自の文化の衰退を余儀なくされた歴史に直面しながら、連綿と文化をつないできた二風谷の人々に、アイヌ民族として生きる誇りを感じた。

取材の最後に、「沙流川歴史館」を訪ねる。展示されている縄文土器の縄目模様がアイヌの文様に重なってくる。

多彩な風土に恵まれた日本には、自然に寄り添い、多様な文化をはぐくんできた歴史がある。そういえば、ちよつと前までは日本人の誰もが自然への畏敬をもって生活を送っていた。その原点が、今もアイヌの人々の文化の中に息づいている。

文/村上憲加 写真/満田美樹

(注)正式名称は「アイヌ文化の振興並びにアイヌ伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」



▲工芸館の展示作品。モレウノカ(緩やかに渦巻く文様)、アイウシノカ(とげのある形)、シツノカ(神の目と呼ばれるひし形)等の文様が描かれる。上は工芸館入口に施された文様

- 菅野茂二風谷アイヌ資料館 ☎01457-2-3215
- 平取町立二風谷アイヌ文化博物館 ☎01457-2-2892
- 平取町アイヌ文化情報センター(二風谷工芸館) ☎01457-2-3299
- 沙留川歴史館 ☎01457-2-4085



上/平取町立二風谷アイヌ文化博物館内部
下/沙留川歴史館入口

硯の銘産地—雄勝硯

(宮城県石巻市雄勝)



写真/東北経済産業局提供

硯の生産で日本一を誇る雄勝硯は、室町時代に始まり、伊達藩が硯師を抱えて育成したことから硯製造が地域産業として発展し、現在に至っている。

色は黒又は暗い藍色で艶があり肌はなめらか。墨を刷る際に歯の役目をする鋒ぼつと言われる「海」部分が荒で、硬さ等のバランスがよく、実用的な硯から装飾を施した贈答用まで種類も豊富。吸水率が低く、長年使用しても変質しない美しい肌を保っているのが自慢だという。

硯の原料となる石は、太古の川底の泥が堆積して出来た石で、昔から一般の人が採掘しないように「お止め山」と言われてきた。今もノミを使って一枚の石から全身で重心を取りながら縁取りし丁寧に製作、彫りあげた硯は3段階

に分けて磨き、仕上げは漆塗りのつや出しが墨による墨引きをする。現在雄勝町を中心に19社あり46名が従事している。雄勝硯生産販売協同組合 ☎0225-57-2632

町屋に似合う朱色の器、調度品 村上木彫堆朱

(新潟県村上市)

花や鳥、山水を木に浮き彫りし、漆を繰り返し重ね塗りし、さらに毛彫りするという気の遠くなるような作業から生まれる「村上木彫堆朱」は、町屋再生プロジェクトの取材(10頁)の際も古い町屋の居間で器、盆、菓子器等を拝見し、漆工芸品として愛用されているのがわかった。村上藩時代より継承されてきた越後を代表する工芸品である。木地師と彫師、塗師の3部門の分業で一つの製品が誕生する。



写真は三彩彫をする川上さんと、「早撰堂」菓子店で愛用の堆朱品

代表的な「堆朱」は、漆塗りを数回したあと艶消し仕上げするもので、他に、花に色漆したり金箔を施した金磨塗、表面に溜漆をしてアメ色にする朱溜漆等6つの種類があるが、城下町情報館で実演していた川上健さんは「三彩彫」という堆朱の中では最も繊細な技術が必要な作品作りをしていた。ホウの木の生地に3色と黒の漆を塗った後、表面に花等を彫りあげていくもので、23工程があるという。

現在木彫師は20人程おり、食器等以外に花瓶や座卓、飾り棚等も製作している。村上堆朱事業協同組合 ☎0254-53-1745

独特の風合い「小千谷縮」 昭和村から糸を仕入れて

(新潟県小千谷市)

越後には伝統的工芸品に指定されている織物が多いが、



着物通に人気の越後上布の中で特に珍重されているのが小千谷縮。織った布を湯の中で均一に手もみすることで「しぼ」という細かなひだが出来る。しぼがあると、布が肌にまとわりつかず、風が抜けて清涼感を感じる。手織りによる小千谷縮は重要無形文化財に指定されているが、生産量・職人も減少し、原料のいい糸の確保も厳しくなった。

縮織保存会の大淵茂さんが注目したのが昭和村が栽培加工しているからむし。村の関係者と交流・研修を重ねてきて、越後上布糸として活用、糸紡ぎの名手も育ててきた。

小千谷では2月から雪溶けまで、雪原に雪晒しする方法が風物詩になっている。雪に晒すと布は織り目も色も鮮明になり、着心地が良くなると言われる。手織りの越後上布・小千谷縮の生産は年間に合わせても百反に満たないが、平成21年にユネスコの無形文化遺産に登録されたのを機に、若い技術者の養成にも努力している。小千谷織物協同組合 ☎0258-83-2220

孟宗竹日本一、竹工芸品の町

(鹿児島県さつま町宮之城)

町を囲む孟宗竹が市町村では全国一の広さを持つ旧宮之



城町では竹を活かした町づくりに取り組み、昭和58年より「みやんじょチクリン村」を開設、竹細工製品の数々を製作してきた。特に竹の花器では全国の70%を生産している。

孟宗竹は、風呂より大きい釜の熱湯で苛性ソーダを入れて数分間煮たあと磨き粉で表面を削り、20日間ほど陰干しする。竹の油分を取り、変色やカビを防ぐためのもので、数人がかりの重労働だ。

編み組みに使う竹は、ナイフ等を使って布のように薄くしたり糸のように細くして編み込んでいく。木製の盆や茶器のように隙間なく編み込んだ重厚なものから、模様編みにしたものなど、その種類は100を超える。

町の伝統工芸センターでは一日竹細工教室を開いており、最近では県外からの受講生が増えている。町内では、ちくりん公園、「竹取り通り」「かぐや姫の里」等、竹の爽やかさを随所に取り入れている。

宮之城伝統工芸センター ☎0996-52-1313

経済産業大臣指定伝統的工芸品 (品目別)

織物

置賜縮(山形県)
羽越しな布(山形県、新潟県)
結城紬(茨城県、栃木県)
伊勢崎紬、桐生織(群馬県)
村山大島紬、多摩織(東京都)
塩沢縮、本塩沢紬(新潟県)
小千谷縮、小千谷紬(新潟県)
十日町紬、十日町明石縮(新潟県)
信州紬(長野県)
牛首縮(石川県)
近江上布(滋賀県)
西陣織(京都府)
弓浜織(鳥取県)
阿波正藍しじら織(徳島県)
博多織(福岡県)
久留米紬(福岡県)
本場大島紬(鹿児島県、宮崎県)
久米島紬、宮古上布(沖縄県)
読谷山花織(沖縄県)
読谷山ミンサー(沖縄県)
琉球紬、首里織(沖縄県)
与那国織(沖縄県)
喜如嘉の芭蕉布(沖縄県)
八重山ミンサー、上布(沖縄県)

染色品

東京染小紋(東京都)
東京手描友禅(東京都)
有松・鳴海絞(愛知県)
名古屋友禅(愛知県)
名古屋黒紋付染(愛知県)
加賀友禅(石川県)
京鹿の子絞(京都府)
京友禅、京小紋(京都府)
京黒紋付染(京都府)

琉球びんがた(沖縄県)

その他の繊維製品

伊賀組みひも(三重県)
加賀繻(石川県)
京繻、京組みひも(京都府)
陶磁器
大堀相馬焼、合津本郷焼(福島県)
笠間焼(茨城県)
益子焼(栃木県)
赤津焼(愛知県)
瀬戸染付焼、常滑焼(愛知県)
美濃焼(岐阜県)
四日市萬古焼、伊賀焼(三重県)
九谷焼(石川県)
越前焼(福井県)
信楽焼(滋賀県)
京焼・清水焼(京都府)
丹波立杭焼、出石焼(兵庫県)
石見焼(島根県)
備前焼(岡山県)
萩焼(山口県)
大谷焼(徳島県)
砥部焼(愛媛県)
小石原焼(福岡県)
上野焼(福岡県)
伊万里・有田焼(佐賀県)
唐津焼(佐賀県)
三川内焼、波佐見焼(長崎県)
小代焼、天草陶磁器(熊本県)
薩摩焼(鹿児島県)
壺屋焼(沖縄県)
木工品
岩谷堂筆筒(岩手県)
樺細工(秋田県)
大館曲げわっぱ(秋田県)

秋田杉桶樽(秋田県)
奥会津編み組細工(福島県)
春日部桐箆筒(埼玉県)
江戸指物(東京都)
箱根寄木細工(神奈川県)
加茂桐箆筒(新潟県)
松本家具(長野県)
南木曾ろくろ細工(長野県)
井波彫刻(富山県)
一位一刀彫(岐阜県)
名古屋桐箆筒(愛知県)
京指物(京都府)
大阪欄間、大阪唐木指物(大阪府)
大阪泉州桐箆筒(大阪府)
豊岡杞柳細工(兵庫県)
紀州筆筒(和歌山県)
宮島細工(広島県)
竹細工
江戸和竿(東京都)
駿河竹千筋細工(静岡県)
大阪金剛簾(大阪府)
高山茶筌(奈良県)
勝山竹細工(岡山県)
別府竹細工(大分県)
都城大弓(宮崎県)
金加工
南部鉄器(岩手県)
山形鑄物(山形県)
東京銀器(東京都)
燕鋳起銅器(新潟県)
越後与板打刃物(新潟県)
越後三条打刃物(新潟県)
信州打刃物(長野県)
高岡銅器(富山県)
越前打刃物(福井県)
堺打刃物、大阪浪華鋳器(大阪府)
播州三木打刃物(兵庫県)
土佐打刃物(高知県)

肥後象がん(熊本県)
和紙
内山紙(長野県)
美濃和紙(岐阜県)
越中和紙(富山県)
越前和紙(福井県)
因州和紙(鳥取県)
石州和紙(島根県)
阿波和紙(徳島県)
大洲和紙(愛媛県)
土佐和紙(高知県)
文具
雄勝硯(宮城県)
豊橋筆(愛知県)
鈴鹿墨(三重県)
播州そろばん(兵庫県)
奈良筆(奈良県)
雲州そろばん(島根県)
熊野筆(広島県)
川尻筆(広島県)
赤間硯(山口県)
石工品・貴石細工
真壁石燈籠(茨城県)
甲州水晶貴石細工(山梨県)
岡崎石工品(愛知県)
若狭めう細工(福井県)
小石工芸品(京都府)
出雲石燈籠(島根県・鳥取県)
その他の工芸品
天童将棋駒(山形県)
房州うちわ(千葉県)
江戸からかみ、江戸切子(東京都)
尾張七宝(愛知県)
岐阜提灯(岐阜県)
播州毛鉤(兵庫県)
福山琴(広島県)
丸亀うちわ(香川県)
八女提灯(福岡県)

編集後記

▼今冬も各地から雪の便り。秋山郷は3mの雪、南信州の木地師の里も東北も例年になく寒波と雪だという。そんな中で人々は黙々と工芸品づくりに精出しているのだろう。春はもうすぐ、商品の完成と販売UPを切望して(A)
▼織物体験に応募するのは女性、炎を前に、煉瓦づくりに目を輝かせるのは男性たちであった。ものづくりの現場に男女差はないと思うが、ものに対する興味や取り組み方に、男女の本質的な違いを見たような気がした(M)

De POLA No.40

【でぼら】2011年春夏号

発行日／平成23年2月25日

発行所／財団法人過疎地域問題調査会

〒105-0001 東京都港区虎ノ門一丁目13番5号
第一天徳ビル3階

☎ 03-3580-3070 FAX03-3580-3602
<http://www.kaso-net.or.jp/>

編集協力・印刷／株式会社ぎょうせい
編集工房アド・エー

交流居住のポータルサイト発信中!!

<http://kouryu-kyoju.net/>



交流居住ポータルサイト「交流居住のススメ」では、全国約530の各自治体が、田舎への定住や田舎と都市を行き来するライフスタイルの情報を提供しています。空家情報、滞在施設、体験プログラム、生活関連情報、支援施策など、掲載プログラムは約4700件。地域別や目的別など6種類の検索方法で必要な情報をお探しいただけます。

また、「メールマガジン」を、毎月第1、3水曜日に発行し、交流居住に積極的な自治体からのメッセージや田舎に定住した方からのお便り、全国で開催される様々な交流イベント等を紹介しています。購読をご希望の方は、ポータルサイトからお申し込みください。

交流居住優良事例集

「田舎暮らしのススメ」⑤(2010年版)交流居住に取り組む自治体の風土や交流施策と、交流居住者の体験談などを紹介する「田舎暮らしのススメ」(A4版80頁)が発行されています。今号では、田舎暮らし実践者の談話を多く取り上げています。ご希望の方は、ポータルサイト「交流居住のススメ」の資料配布コーナー、または左記の財団法人過疎地域問題調査会にお申し込みください。

たくさんの雫が 雄大な流れをつくるように……。

一人ひとりの夢は、やがて大きなチカラとなり、
身近な街づくりへさまざまなかたちで活かされています。
その夢からはじまる快適さの流れを、これからも。
宝くじの収益金はさまざまな事業を通じて暮らしのお役に立っています。



当せんはしっかり調べて、しっかり換金。

- 宝くじの収益金はみなさまの身近な街づくりに役立てられています。
- 外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。